
最良の一日

要徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最良の一日

【Nコード】

N9235Q

【作者名】

要徹

【あらすじ】

ある日虐めっ子のあいつとの揉み合いの末、クラスの人気者で、唯一虐められっ子の僕の味方をしてくれたあの子を殺してしまつた。犯人は僕かあいつのどちらかだ。あいつも僕も罪を認めず、その時あの子は絶命していなかったが、あいつは黙ってあの子の遺体をどこかに隠してしまい、誰もが口を閉ざした為に事件は闇に消えた。僕はあの子へ直接謝罪する為に、隠された遺体を搜索するが発見には至らず、時だけが無為に過ぎていった。あの子が消えたことによつて僕の人生は大きく変貌していき、人格はどんどん歪み、

消えたあの子への想いは募り、あいつへの憎しみは日に日に増していく……。そして時は過ぎ、僕の将来を決定づける運命の『あの時』がやってくる。

歪んだ愛情を貫く『僕』が、残忍酷薄な『あいつ』に抱く憎悪を描いた復讐譚。

罪人の行き交う夜の街であいつを見つけた時、今日が人生で最良の一日になると確信した。血の涙と糞尿を垂れ流し、待ちに待った時が今、ようやく訪れたのだ。ここまでの道程は決して容易なものではなかった。苦痛と憎悪に押し潰されそうな日々耐えながら、そして死んでしまいたい思いに駆られながら、この日をずっと待ち望んできた。今の喜びは、とても言葉で言い表せるものではない。

僕は吐瀉物としゃぶつの酸っぱい臭いに包まれ、腐敗した死骸の一つでも転がっていてもおかしくなれないと思われる薄汚れた路地裏から、これまた薄汚れた匣はこを持って出ていき、あいつの後ろについて行った。

あいつの向かう先は分かっていた。あいつの目指す目的の店まではほんの数分で到着するのだが、その間、僕は抱えた匣の中身が飛び出してこないか、心配でしようがなかった。我慢できずに飛び出してこられては、元も子もない。もっとも、それは杞憂だったように、あいつと僕が店に到着するまで匣は暴れなかった。

店の扉には『CLOSE』と記された札がかけられている。それに構わず、あいつは店内へ入っていった。僕も、暫く間を置いてから入店した。

店内は暖色系の明かりで包まれていて、クラシック音楽がかけら

れていた。天井ではシーリングファンが静かに音もなく回っている。入口から右手側にカウンターがあり、その奥には色とりどりの酒瓶が並べられている。そして店の一番奥のテーブル席に、琥珀色をしたウイスキーとグラス、氷が置かれている。あいつはそこでウイスキーをちびちびと飲みながら、閑散とした店内を見回していた。

僕は黙ってあいつのテーブルへ近づいていった。すると、僕が口を開く前にあいつの口から嗤いととも、汚らしい言葉が飛び出した。

「気持ちの悪い男だな。ここはお前のような奴が来る場所じゃないぞ。さっさと出て行け」

そう言うときあいつは眉毛を吊り上げ、出口の方へ顎をしゃくり、グラスに入ったウイスキーを一気に飲み干して？をした。それでも出て行かない僕に怪訝^{けげん}そうな顔で鋭い眼差しを向け、さらに言った。

「まさか、こんな所へまで宗教の勧誘か？ お断りだ」

宗教か。確かに、この格好ならそう見えるだろう。夏なのにも関わらず、暗幕にも似た分厚い布を全身に纏^{まと}って、顔を半分隠し、さらには怪しげな匣を抱えているのだから、そう勘違いされてもおかしくない。だが、僕は決して宗教の勧誘なんて低俗なことで、あいつを追っていたわけではない。もっと高尚な理由がある。

白々しくも、恭しく僕は答えてやる。

「いや、何だかおかしいなと思ひまして。このお店、今日は私が貸し切っておいたはずなのですが。店長から何も聞いておりませんか？」

「何だと？」

草臥^{くたび}れた黒いスーツを綺麗に着込み、長い髪を後ろに撫でつけたあいつは、生ごみを見るような目でこちらを見た。いつになっても変わらないものが、そこにあった。

「あなたは、どうしてここに？」

突然の質問に面食らったらしく、眉根に皺を寄せた。

「俺は今日ここで友人と会う約束をしている。しかし、お前の貸し切りならば仕方がない。俺の方が出て行こう」

あいつは鞆を抱えて出て行こうとした。僕はあいつの背を目がけて呼び止めの言葉を発す。

「ちょっと待ってください。別に、この一角程度なら問題ありませんよ。どうぞ、ここでお待ちください」

「ん？ そうか。それはありがたいな」

「その代わりと言っては何なのですが」

あくまで謙虚に、媚^こびるような声を取り繕った。

「是非、私の連れが来るまでお話の相手をしてもらえませんか？」

あいつは少しの間悩み、僕の提示した条件を受け入れた。

「話くらいは聞いてやっても良い」

ふん、と鼻を鳴らし、元いた椅子に腰掛けた。僕もそれに従って座り、わざとらしく店内を見回した。

「それにしても、初めて来ましたがここは良い店ですね」

「そりゃあそうだろう。何せ、俺の友人がやっている店だからな。こういう店を持つことが、友人の夢だった。長年努力して、やっとこの店を構えたんだ」

長年の努力か。僕は思わず吹き出しそうになった。店主があの時のことを少しでも覚えていいるならば、こんな所でのうのうと酒を注ぐ仕事になんて就けるはずがない。店主の天職は、地獄の業火に焼かれることだけだ。そして、それはあいつも同じことだ。

「そうだったんですか。それは失礼」

「しかし、何で店主がいない。それにこの臭いは何だ？」

二杯目をグラスに注ぎながら、あいつが問う。やはり両方に違和感を覚えるか。仕方なく、適当な言葉を吐いておく。

「どうも、店主さんは裏口で作業をしていたようですが。それと、この臭いは多分私ですね。体臭が酷いもので」

「そうか、なら良い」

僕もあいつと同じように、琥珀色の液体をこくりと飲む。喉元が焼けるような感覚だ。僕がこいつに抱く憎しみと同じような、熱い、

感覚があつた。

暫く無言が続いたが、その間あいつは何度も携帯電話を弄っていた。開いては閉じ、開いては閉じを繰り返し、その行動を目の前を飛び交う蠅のように鬱陶しく感じた。しかしこの行動があるということは、計画が上手くいつている証拠だろう。安心して話を進められる。

「何か、ご用がありましたか？」

わざとらしくそう問うと、あいつは携帯電話を乱暴に閉じ、

「暫く連絡を取れない友人がいてな。最近まで返事をしてくれていたのに、今はないんだ。だから少し心配なだけだ」

と、柄にもなく不安げな表情をした。こんな顔を見るのはいつ以来だろうか。　そうか、あの子がいなくなったあの時以来だ。

「それで、話はしないのか？　こちらとしては、お前のような奴の話は聞きたくないから、話さないならそれで良いんだが」

あいつは顎鬚を摩りながら、もう片方の手で煙草を取り出し啜えた。

予想以上に早く、本題に入ってきたことに少々面食らった。まあ、いつかは話し始めるのだ。タイミングは別に重要ではない。問題は匣の中のものが大人しくしてくれているかどうかだ。話し終わるまで、ちゃんと我慢してくれと、心の中で強く念じた。

「ちよつとした、昔話です。話したくて仕方なくて」

「面白ければ良いんだが」

煙草に火をつけ、紫煙を吐き出す。

「きっと、興味深いお話だと思います」

あいつはどかりと両足をテーブルに寄せ、三流悪役のような格好になった。そして、話を始めると目で言った。

僕は、咳払いを一つして、物語を始めた。

匣が、くつくつと嗤った気がした。

周囲から大きく離された席に、あいつがへらへらと嗤いながら近寄ってくる。目的は分かっている。どうせ僕を侮辱するだけなのだから、関わり合うだけ無駄だ。

2

僕はすうつと肺一杯に空気を吸い込み、表情を殺し、死んだふりをする。

「お前つて、本当に気持ち悪いよな」

やっぱりだ。こいつは毎日、開口一番にそれを口にする。僕は、意識的にただ真っ直ぐに黒板を見て、何も見ておらず、聞こえていないふりをする。意思とは無関係に、記されている文字が見える。理解に及ばない数式が隅々に記され、左下に日直の名前が、丁寧な字で書かれている。これを書いたのは優等生のあの子。今日の日直は、目の前でにやついているあいつだ。

「無視すんなよ」

彫刻刀で差別用語が彫られた机に両手をつき、いやらしい笑みを浮かべながら僕を見下す。知ったことじゃない。あいつと関わると、碌ろくなことがない。いつも、いつも、いつも。僕のような弱者をいたぶっては、悦に入る。悪趣味なことこの上ない。

「無視すんなって言ってんだろ！」

勢い良く机を前に引き、埃や紙屑が散乱した床にそれを倒し、逆さまにした。道具箱から、シネと柄に彫られたカッターナイフや糊、セロハンテープ、さつき使ったばかりの算数の教科書に、次の授業で使われる道德の教科書が散らばり、細かい埃が宙に舞った。

「アッ……………」

あいつが嗤う。不愉快だ。厭だ。死ねば良い。その笑窪から、顎までをカッターナイフで切り裂き、二度と嗤えないようにしてやりたい。あの雑言ばかりが吐き出される口に、有りつ丈の糊を流し込み、唾液と混じらせて、二度と口が開かないようにしてやりたい。

黙々と散らばった教科書や道具を拾い集め、机を立てて、それらを道具箱に仕舞って、元通りにした。だが、次の瞬間に、あいつは同じように中身をぶちまけさせた。その行為に、思わず涙が滲み出した。目の前が霞んでいく。

僕が何かをしたのか。していない。するはずもない。あんな汚らしい人間と関わりたいと思う人間はいない。圧倒的な力だけでのし上がった独裁者なんかと、言葉すら交わしたくない。

しかし、そう思っているのは僕だけのようだ。周囲の人間もまた、あいつと同じように嗤っている。冷徹な視線を頭上に注ぎ、誰も僕を助けてくれようとはしない。何故助けてくれないのか、解らない。あいつらに、僕は何もしていない。何もしていないのだ。いや、何もしていないから助けてくれないのか。だとすれば、何故あいつらは、あいつと同じように僕を攻撃する。あア、そうか、弱

いからだ。弱者は、弱者を見下すことでしか自分を強く見せられない。なら　僕は弱者なのか。それは嫌だな。

もう一度それらを拾い集めようと教科書を手に取った瞬間、あいつの鋭い足が、腹に突き刺さった。声も上げられない。みつともない。情けない。僕は呻きながら、ダンゴ虫のように埃と消し粕に塗れた床へ転がる。明滅している電灯が目に入った。眩しい。窓の外を覗き見る。鈍色をした天を見て、一層不愉快になる。空すらも、本当の笑顔を見せてはくれないようだ。

あいつらの見せる笑顔は、笑顔ではない。嗤ってはいるものの、笑顔ではないのだ。もし、それを笑顔だと言うのなら、そんなものの、この世から滅びてしまえば良いと思う。

じゃあ、僕のは笑顔なのか。笑ってみる。あいつよりは、きっと綺麗な顔になっているだろう。

「こいつ、何笑ってんの。笑うなよ、気持ち悪い」

亀が引つ繰り返ったように無防備な腹に、あいつは両足で飛び乗った。それが、二度、三度と繰り返された。堪らない激痛と屈辱が、体と精神を蹂躪していく。僕は抑えきれず、嘔吐する。黄色い、胃液の混じった吐瀉物が道具類に付着した。周囲から、気持ち悪い、という聞き飽きた言葉が刃となり刺さる。

「もう、いい加減にしなさいよ！」

脳が軋みながら、回転する。瞼を開き、充血した眸であいつの方を見やる。すると、麗しいあの子が、あいつを僕から遠ざけていた。それでもあいつは嗤う。あの子は、呆れた顔をしてあいつを見送っ

ている。あいつの向かう先は、給食の配膳場所。そうか、今は給食時間だった。

「君、大丈夫？」

オルゴールが奏でているかのような、綺麗な声。そして、本当の笑顔。つくづく、耳は完全に閉じることができないことを、神に感謝しなければと思う。彼女こそ、救いだ。あの子が僕だけに捧げてくれる声を聞く為だけに、虐めに耐えていると言っても過言ではない。もし、虐めがなく完全な黙殺であれば、きっとあの子は声すらかけてくれないだろう。虐めは、僕とあの子が関わり合う為に重要なものだ。もっとも、虐め自体は喜ばしいものではないし、暴力行為を加えるあいつが大嫌いだ。

「あいつ、本当に酷いね」

その通りだ。濁すことなく、あいつに反抗の刃を向けるのは、この子しかない。その他の奴らは、皆、隷属、いや、金魚の糞同然の存在だ。あいつが何か命令して従わないクラスメイトはいないし、いつも何人も連れて歩いている。あいつにとって、クラスメイトは従順な駒なのだ。だから、あいつらは寄ってたかって僕を攻撃するのだ。一度刃向かえば、僕のようになってしまう。良い見せしめとなっているのだ。

あの子はトイレトペーパーで汚物を手早く拭き取り、

「早く給食を持って行ってあげてください！」

と叫んだ。するとあいつが、分かりましたア、と間抜けな声で返事をした。あいつの持ってくる飯なんて、いらない。けれども、こ

の子が持つてきてくれるのであれば、それが例え毒であろうとも、体の一部であろうとも、唾液であろうとも、糞尿であろうとも、何の躊躇ためらいもなく食すことができるだろう。僕は、彼女が好きだ。彼女がいなければ、生きていけない。しかし、言葉を交わしたことは数えるほどしかない。

彼女だけは、何の差別もなく、僕に接してくれている。一緒にいれば、彼女もまた虐めいじの対象になるというのに、そんなことは関係ないようだ。給食と一緒に食べてくれ、遠足では一緒にグループになつてくれ、先生から質問を受けた際には、吃音症があるから見逃してやるようにと頼んでくれた。

あの長く、艶つややかな黒髪。ワンポイントの白い花の髪飾り。少し丸い鼻にある雀斑そばかす。清流のような、透き通った肌。類稀なる頭脳。あの黒板に書かれている丁寧な字も、彼女が書いたものだ。この子は、僕の希望であり、容姿、性格、どちらをとっても憧れた。クラス的女子も彼女には一目置いており、誰もがあなりたいと願っているようだが、それと同時に少々疎まれうとれる存在でもあるようだ。どこでもそうだと思うが、嫉妬とは恐ろしいものだ。

「そいつ、お前のこと好きなんだぜ！ 気持ち悪い！ 諦めろ。その子はお前のことなんて、これっぽっちも好きじゃない！」

クラスメイトからお腕を受け取りながら、あいつが嘲笑った。周囲が俄ににざわめき始め、口々に気持ち悪いと僕を罵った。しかし、そんな中でもあの子は顔色一つ変えずに、吐瀉物を片付け、道具類を拾い集めている。その健気な姿に、どうしようもなく胸が痛む。

笑いの渦巻く中、やつとの思いで起き上がり、潰れて叫びをあげる肺一杯に彼女の匂いを取り込む。甘い、良い匂いがした。ずっと、嗅いでいたい。どこから香るのだろう。

どうやら、あの子の髪から香っているようだ。まるで、髪飾りが本物の花のように思えるくらいに、はっきりとした芳香を感じる。この香りさえあれば、僕はいつまでも、どんな目に遭っても生きていける。これからずっと、あいつと関わっていくのなら、これが欲しい。彼女の甘い芳香を放つ髪が、欲しい。頼めば、一本くらい譲ってくれるかもしれない。意を決して言葉を発す。

「髪」

聞こえていないのか、彼女は黙って道具類を拾い集めている。

「髪」

少し、声を大きくする。反応はない。苛立つ。

「髪」

「何？」

聞こえた。彼女と言葉を交わすなんて、久しぶりだ。自分からとなると、これが初めてだ。心臓が生きているかのように跳ね回る。血管が蚯蚓みみずのようにうねり、体の至る所に青く浮き出てくる。額から、ぬめぬめとした脂汗が流れてくるのが、はっきりと分かる。

「髪」

「何？ 聞こえないよ」

嘘だ。聞こえているはずなのだ。しかし、怪訝そうな顔を見てい

ると、どうも嘘とは思えない。僕は頭を掻き^{むし}き、純粋な心を持つ彼女に、もう一度チャンスを与える。この思考が傲慢であることは自覚するが、どうにもそれ以外の、適切な言葉が見つからない。

「髪」

「カミ？ ああ、神様ね。そんなのいないわよ。誰も君を助けてくれないもの。非道^{ひど}いったらないわ」

神はいる。君だ。

いや、そんな話ではない。僕は、君の程良く油の塗られた、艶^{つや}やかな髪が欲しいのだ。何故伝わらない。何故解ってくれない。もどかしい。腹立たしい。むらむらと、腹の底から怒りと憎悪が込み上げてくる。好きなはずなのに、この感情は何だ。

胃が、鉛を呑みこんだかのように、ずうんと重くなる。もしかして、彼女までも僕を無視しようというのか。嫌だ。やめてくれ。僕を見放さないでくれ。仮に、見放されたらどうなる。二度と、この甘い芳香を嗅ぐことはなくなるのではないか。救いがなくなる。嫌だ。耐えられない。なら、いつそのこと。……

その時、僕の頭で、ぷつりと音がした。ぴんと張った糸が、勢い良く切れたような……。具体的に例えるなら、ギターの弦が切れたような音がしたのだ。

「いやア！」

空を裂く叫びが、教室中に響き渡り、木霊^{こだま}した。きつと、教室内の全ての生徒が、虫たちが、僕らに視線を突き刺しただろう。それ

もそうだ。

僕は、彼女の髪の毛を力一杯に引き千切っていたのだ。抵抗する彼女を無視して、何度も、何度も、何度も。綺麗に整えられていた髪は乱れ髪となり、可愛い白い花の髪飾りが埃を纏いながら床を滑っていった。

彼女は力の限り暴れた。何度か、頬を打たれた。嬉しかった。抵抗されればされる程、何かが燃え盛り、もっと引き千切れと、悪魔が囁いた。それに従い髪を千切り続けたのだが、どうにも効率が悪い。もっと、ばつさりと、大量に手に入りたい。周囲を見回す。銀色のトレイを持ったまま、茫然と立ち尽くしているあいつらの顔が、視界に入る。無視。そうだ、カッターナイフがある。ちきちきと錆びた刃を伸ばし、力づくに彼女を抑え込んで、髪に手をかけた。

しかし、そこで邪魔が入った。あいつだ。僕の給食が乗せられたトレイを放り投げ、飛びかかってきた。あいつの必死な形相からは容赦などという甘い意思が内包されているとは思えない。

「何やってんだ、やめろ！」

その時、僕が何を言ったのか判らない。覚えていない。ただ、とんでもない、狂人のような奇声を発していたことだけは覚えている。

僕はあいつと暫くもみ合った後に突き飛ばされ、掃除用具箱の角で頭を強く打った。鮮烈な痛みが、僕を正気に戻した。その時見た教室の光景は、モノクロだった。誰もが表情を失い、凍りつき、空気が時間までもが動きを止めていた。

何故こんな奇行に及んだか解らない。いくら見放される恐怖に押

し潰されそうになっていたとしても、この行為は許されるべきことではないだろう。しかし、僕は手に入れたのだ。彼女の、あの髪をもっと欲しかったが、仕方ない。彼女さえいれば、また手に入る。彼女さえいれば、元気な彼女さえいれば。

エッ……。

泣いている。彼女が、しんと泣いている。

衝撃的な光景に、掴んでいた髪の毛を全て落としてしまった。

僕は、何てことをしてしまったのだ。そこで初めて、重い罪悪感に僕は押し潰された。あの子は、僕を助けてくれたのだ。なのに、この仕打ちは何だ。僕は、なんて愚か者なのだ。

謝罪の言葉を述べようと思ったが、あの子は無言で去っていった。クラス全員の視線が頭上に注がれ、突き刺さる。言い訳が思い浮かばない。明らかに僕が悪いのだ。なのに、謝るべき対象はどこかへ行ってしまった。どうすれば良い。廊下から入ってくる風だけが、声を発する。ざまあみろ、と。

無言の時間がどれだけ続いたか分からないが、暫くの後に担任教師が教室へ入ってきた。どうやらあの子には会わなかったようで、何も知らない風な顔だ。彼が自分の机に座ったのを境に、クラスメイトも何事もなかった風に装って給食を食べ始めた。

あいつは僕に向かって舌打ちをして、紙に何かを乱暴に書き殴ってこちらに投げつけた。その中には、放課後に体育倉庫裏に会い、とそれだけ書かれていた。酷い字だった。その字からは明確な怒り、憎悪、疎ましい気持ちが入包されているように思えた。

あいつと同じように、クラスメイトは顔にこそ出していないが、その背中からは明らかな僕に対する敵対心や、猜疑心さいぎが感じ取れた。元より誰からも信用を置かれていないし、今さら信用を得ようとも思わないからどうでも良いが、あの子だけが気がかりだった。きっと、保健室にでも行っているのだろう。今よりも、あの子のこれからが心配だ。僕に関わったばかりに、これから虐めを受けやしないだろうか。この暴力行為に、か弱い女の子が耐えられるとは思われない。何とかしてやらねば。

床に散らばった給食をかき集めていると、ふと、あの子の白い花の髪飾りが目に入った。これは、出会った時からずっとあの子が身に着けていた物だ。そういえば、以前あの子から一方的に、これは施設の人から貰ったプレゼントだと言っていた。ならば、きっと大切な物だろう。届けてやらなければならぬ。いつか返そう。そう思った僕は、それを手に取りポケットに押し込んだ。

結局、あの子は帰りの会になっても帰ってこなかった。担任教師が言うに、気分が悪いと言っているらしい。事実は精神的なショックだろうと思う。

衝動的に襲ってしまった以上、もうあの子は守ってくれない。そこに悪意はなくとも、現実としてそれは罪以外の何物でもない。ならば僕はどうかして、あの子の手を借りずにこの現状を打破しなければならぬ。打破するにはどうすれば良いか。消してしまえば良いのだ。問題となる核さえなくなれば、きっとこの忌まわしい現実を崩すことができるはずだ。それに加えて、あいつさえいなくなればあの子は虐めを受けなくて済むかもしれない。虐めのない、平和な世界が広がるのだ。あいつを殺すこと。それは僕にとってもあの子にとってもプラスになる。実行に移さないなんて愚かだ。

ああ、どうしてこんな簡単なことを思いつかなかったのだろうか。
僕は本当に馬鹿者だ。

髪を切ろうとしたカッターナイフをそっとポケットに忍ばせ、
して今にも泣き出しそうな天の下へ繰り出した。

あいつの消えた世界を思うと、自然と破顔した。

体育倉庫裏に行くと、既にあいつとその取り巻きである生徒二人
長髪の男と顔が角張った男だ　　がそこにいた。あいつの手に
は木製のバットが握られており、背中には黒いランドセルを背負っ
ている。下校時に運動場で野球でもして帰る予定だったのだろう。
しかし、今あいつの手に握られているバットからは、そのような意
図を感じ取ることはできない。そこから感じるのは、痛めつけてや
る、というような破壊願望だけだった。

「逃げずによく来たな」

いやらしく口角を上げ、バットを肩に乗せる。

「何の用？」

久しぶりに、あの子以外の人間と言葉を交わしたような気がする。
家に帰っても両親と会話することはないし、近所の人と関わりもな
い。僕の日常は、誰と口をきかなくとも成り立つようにできてしま
っている。少し寂しい気もするが、あの子さえいてくれればそれで
良かったのだ。両親も、近所の人も、友人も、何もいらぬ。

「もうお前が学校に来られないようにしてやろうと思ってな」

予想通りだ。こんな人気のない場所に呼び出す理由なんて、これくらいしかない。この体育倉庫は運動場の隅、裏門の東側にあり、石の塀を越えれば廃屋が四棟ある。クラスメイトがその廃屋へ入って遊んでいたのを記憶している。付近には変質者が出るとかいふ噂があり、近所の人間は誰も近づかないし、そもそもこのH小学校付近に住宅はない。つまり、この周辺に人が通りかかることは有り得ず、どれだけ僕が叫ぼうとも誰の耳にも入らないわけだ。ここは、無慈悲なリンチには最適だ。

「ふうん」

ポケットに手を入れ、カッターナイフの刃を伸ばす。あいつらに聞こえてはいないだろうが、かたかたと刃の伸びていく音を確かに聞いた。あまり長く刃を伸ばせば折れてしまうし、短過ぎれば刃が届かない。その調整が難しかったが、ポケットの底に刃が届いたのを感じて、これで良いと確信した。あいつらが襲いかかってくれば、素早くこれを抜いて、切りつけてやれば良い。後始末は、その時考えれば良い。皆殺しにしてしまえば、目撃者は誰もいないのだ。問題は無い。

「何で？」

問う。

「何でだって？ 邪魔だからに決まってるだろ。お前がいると、教室の空気が腐るんだ。それに触れた物には雑菌がべったりとくっつく。害なんだよ」

害、というならばあいつの方が余程クラスの害だと思う。何せ、あいつは力でクラスを従えている独裁者だ。それはこの取り巻きた

ちも例外ではない。一度あいつに目をつけられれば、激しい暴力と陰湿な行動で己の人格を破壊されてしまう。実際転校に迫いやられた生徒もいる。初めに見せしめとなったその生徒の所為で、今のよくな独裁体制が築かれてしまった。では、何故誰も団結してそれを崩そうとしないのかと僕は思うのだが、誰もあいつには逆らわない。仮に教師に訴えるなどして反逆を起こし、独裁体制を崩壊させたとしても、その後が恐ろしいのだ。報復としてどれだけの刃が己に向けられるのか、想像できないからこそ人を怯えさせ、自ら牙を折る。圧倒的な暴力は、反逆の精神を蝕んで崩壊させる。

生徒がどうにかできないのなら親はどうしているのか、教師は何をしているのだと考えるだろう。簡単な話で、教師はあいつの親を心底怖がっている。理由こそ分らないが、きつとどこかの権力者が何かなのだろう。モンスターペアレントという表現が似つかわしい。

「それにな、あの子は俺のものだ」

耳を疑った。あの子が、あいつのものだって？ いや、それよりも、あいつはあの子を好いていたのか。初耳だ。あの子は、一体あの子はあいつをどう思っているんだ。まさか、両想いだということはあるまい。

「それで？」

あくまで冷静に先を促す。

「お前がいると、あの子が汚れるんだ。お前と一緒の空気も吸わせたくないのに、声をかけられやがって。知ってるか？ あの子は俺と付き合ってるんだって、クラスで噂になってるんだ。あの子は嫌がってるけど、あれは照れ隠しだ。そのうち、あの子は正式に俺の

彼女になる。お前、声をかけられているからって、少しでもあの子
が自分に気があるんじゃないかとも思ってみる。今すぐ頭を砕い
てやる」

そう言つと、あいつはバットで空を裂いた。

なんだ、嫌がっているのか。ならばあの子にその気はなさそうだ。
クラスの噂話は単なる噂であり、何の信憑性も持っていない。それ
を真に受けて告白しようとするあいつは、どれだけ間抜けなのか。

しかし、これですつきりした。自分の好きな女を奪われると
思ったからこそ、あいつは僕を目の敵にしていたのか。思い返せば、
落とした鉛筆をあの子が拾ってくれたのが、僕があの子に好意を抱
くようになったきっかけだ。元より僕は引つ込み思案で、それこそ
今の状況から暴力行為が消えただけの学校生活を送っていたのだが、
その時を境に暴力が加わった。特に誰の気に触れるようなことをし
た記憶はないし、誰とも話していないのだから恨みを買うこともな
い。それなのにどうして、と思っていたがこれで合点^{がてん}がいった。あ
いつは、あの子が僕を好いているのではないかと危惧しているのだ。

「そういうわけで、お前には学校へ来てもらいたくないんだ。万に
一つでも、あの子の気持ちがお前に移っちゃあ困る。災いの元は絶
つておかない」と

バットを僕に突きつける。

災いの元は絶つておかないと、か。まさかあいつも僕と同じ思考
をしていたとは、思いもしなかった。嫌な共通点だ。

じりじりと砂を蹴り、近づいてくる。

ポケットの中のカッターナイフを握り締める。いつ襲ってきても良い。臨戦態勢だ。しかし、相手が三人とは随分分が悪い。仮にあとを切りつけることに成功したとしても、取り巻きが僕を取り押さえるだろう。それに、一撃で仕留めない限りあいつはいつか立ち上がり、反撃を加えるだろう。そうしなければどうする。いや、考えるだけ無駄だ。今は、あいつだけを殺せれば　一矢報いれさえすれば、それで良いのだ。

あいつがバットを振り上げ、飛びかかってくる。素早くカッターナイフを取り出し、切りかかるうとした。

だが。カッターナイフと同じポケットにあの子の髪飾りを入れていた所為で、取り出した時にそれが砂の上に落ちてしまった。それに狼狽した僕は、そちらに視線を移してしまった。一瞬の出来事だった。

鈍い音がして、体からありとあらゆる力が抜け、砂上に倒れ伏した。筋肉が弛緩し、透明な尿が大量に流れた。声も出なかった。息ができない。直接蹴られた時とは違う鈍痛に、体は支配されてしまった。

どれだけ悲痛な声をあげようとも、追撃は止まない。取り巻きたちも加わって、さらに暴力を加えた。抵抗したい気持ちは山々だが、体が言うことを聞いてくれない。骨が叫び、肉が泣いている。徐々に、意識がぼんやりとしてくる。そんな時、あの子の白い花の髪飾りだけが視界にあった。この世のものとは思えぬほど、綺麗だった。

「やめなさいよ!」

誰の声か、理解できなかった。しかし確かに聞き覚えがある。この美しい声の主は、この広い世界で一人しかない。あの子だ。

「何でお前がこんなところにいるんだよ！」

声の上擦っているのが分かる。

「教室から見えたのよ！ もうやめなさい！」

そうか。ここはあらゆる場所から死角だと思っていたが、唯一、クラスの教室から見る事ができるのだった。きっとあの子は、保健室からランドセル等を取りに教室へ戻った際に、こちらに気づいたのだろ。しかし、どうして助けてくれる。僕は、とんでもないことをしてしまったのだ。それなのに、何故。

「お前には関係ないだろ！ 退いてろよ！」

激しく言い立てるが、あの子は一步も譲る気は毛頭ないらしく、いよいよ声を荒げて、僕にとっても、あいつにとっても衝撃的なことを口走った。

「関係ある！ 私、この子が好きなんだもん！」

時が止まったような気がした。痛みで体は動かせないが、耳は確かにあいつの荒い息遣いを聞いた。狼狽うろたえているのだ。本当のところ、僕もあの子の言葉に狼狽うろたえていた。まさか、あの子と僕が両想いだったなんて、信じられない。

「う、嘘だ！ そんなこと、信じられるわけがない！」

同じ気持ちだ。

「本当よ」

鋭い衝撃に貫かれたあいつの手から、バットが乾いた音をたてて落ちた。確かに、この目で弾む棒きれを見た。今しかチャンスはあるまい。僕と彼女の邪魔をするあいつを殺すのは、今しかない。

痛みを抑えつけ、カッターナイフを拾い上げてあいつに切りかかる。あの子が短い悲鳴をあげた。

流石というべきか、あいつは僕の右手を素早く制した。僕の力と、あいつの力。その二つが闘せめぎ合い、どちらの手も動かない。外野の取り巻きがぎゃあぎゃあと騒いでいる。きつと取り巻きたちも、あいつが死ねば良いのに、と心から願っているのだ。僕に勝利させてくれと、神に祈っているのだ。だから、誰もあいつを助けようとしていない。ざまあみろ。お前はここで死ね。

「ちょっと、やめてよ！」

あの子が止めに入る。いくらあの子の頼みでも、ここでやめるわけにはいかない。間違いなく僕と彼女の障害になるあいつは、今ここで確実に消しておかなければならない。災いの元は絶っておかなければならないのだ。

「やめなさいって！」

あの子の手があいつの手に触れた時、一瞬、相手の力が緩んだ。ぐいと力を込め、あいつの方へ腕と一緒に刃を滑らせる。しかし力が緩んだと思った次の瞬間には、また元の力が戻ってきてしまった。あいつは僕の右手を手前に引き、一撃をかわした。

その時、柔らかいものに何かを刺し貫いたような感触があった。それと同時に、彼女の体がふっと視界から消えた。

彼女は、どこへ消えた？

視線を下へ落とすと、そこにはカッターナイフが首に突き刺さり、激しく全身を痙攣けいれんさせている彼女がいた。首には紅の一字が引かれていた。見たことのないくらいに綺麗で、真つ赤な血が、小さな池を作っている。激情がすうっと引いていくのを感じた。火照ほてった体が清冽せいれつな湧水に浸かったような、心地良い冷たさを感じた。

「ア」

それ以上の言葉が出ない。彼女が死んだ。正確に言えば、今、生きようと必死に藻掻もがいている。誰がやった？ 僕か？ 違う。あいつが邪魔をしたから、結果としてこんなことになってしまったのだ。僕は悪くない。

「ど、どうすんだよ、これ。気持ち悪い！」

震える声で、あいつが言う。気持ち悪いという言葉に、腸はらわたが煮え繰り返るようだった。醜みにくくなってしまうえば、もう必要ないというのか。お前の彼女への想いは、所詮その程度だったというのか。僕は違う。こんな姿になっても、彼女が好きだ。あいつなんかに、あの子を愛する資格はない。

「お、お前の所為だぞ！ こいつは、お前を好きだったんだ。お前が責任とれよ！ 俺はあいつのことなんて好きじゃなかったんだ。だからお前の所為だ！」

論理が破綻している。結局、あいつのあの子を想う気持ちは、その程度のものであったのだ。あまりにも安く、脆く、醜い。あの子が死ぬことによってあいつと結ばれることがなくなって、不謹慎ではあるが、心の隅で安堵した。

あいつの目は泳ぎ、取り巻きたちは黙って色を失いつつある死体を見おろしている。どうやら、どうして良いか解らずに相当狼狽ろっばいしているようだ。それはあいつだけではない。僕の敵である取り巻きも、死んだ魚の目のように白濁した眼をして、顔はこの空のように鈍色だ。彼女から噴き出した血液は相当な量だが、幸い服に少量が付着しただけで済んでいる。砂地に溜まった鮮血が美しい。

僕が無視したことに業うづを煮やしたのか、

「くそ！ 運ぶぞ。お前、手伝え！ お前ら、誰かに話してみる。ただじゃおかないからな。良いな、このことは忘れるんだ。それとお前は飛び散っている血に砂を被せておけ。良いな！」

角張った顔をした男に命令すると、あいつは長髪の男と、カッターナイフが刺さったままの彼女を担いでそこから去って行った。

彼女が死にかけているというのに、不思議と、僕は冷静だった。それどころか、あのようになっても尚、生きようとする生物の神秘を垣間見たことを、心のどこかで喜んでいた。まだ彼女が息絶えていなかったから、そう思ったのかもしれない。いや、これは夢だと心のどこかで思っていた。だからこそ冷静でいられたのだ。もしこれが夢ではないと悟っていれば、発狂していたに違いない。取り巻きの一人が砂を蹴る音を背にして、これは夢だと言い聞かせ続けた。

しかし、彼女の血液にゆつくり触れてみると、それが夢でなかったことを思い知らされた。生温い感触に、紅に染まる手。それらまざまざと現実を見せつけた。震えが止まらなかった。だが、どうしても現実を受け止めることはできなかった。ちっぽけな僕に、この現実はまだにも大きく、負を孕み過ぎている。

いや、まだ、彼女が死んだと決まったわけではない。もしかすればまだ生きているかも知れないではないか。あいつらは、急いで病院へ連れて行ったかもしれない。そうだ、まだあの子は死んでいない。きっと生きている。明日になれば、元気に挨拶をくれるに決まっているんだ。

そんな荒唐無稽なことに一縷の希望を託し、正気を保った。

狂気に沈んでいると、空が涙を流し始めた。冷たい、大粒の涙だった。

涙は血を洗い流し、全てを打ち消す。

だが、彼女の死は消えてくれなかった。

僕はただ、有りもしない希望に縋りつき、茫然として涙に打たれ続けた。

へらへらと笑いながら、あいつが僕の席に近寄ってきた。数年前から変わらず、不愉快な笑みを貫いている。

4

いい加減に死んでくれないものか。あくまで死ねば良いのと思うだけに留まっているのは、あいつを殺す理由がないからだ。小学生の頃であれば、あの子の障害になるという理由で殺すことができた。しかし、今となつてはあいつを消し去ることに意味はない。仮にあの子への弔いとなるならば、話は別だ。だが、単なる仇討や、私怨だけの殺人は無益だ。それにそもそも、あの子を殺したのは誰か、という点が未だに不明瞭だ。勝手な断定で殺人を犯すことは、愚の極みである。

「本当にお前は気持ち悪いな」

「黙れよ」

「まあそう言うな、いつもの冗談だ。今日はな、お前に耳寄りな話を持ってきたんだ。ちよつとくらいは聞く耳を持てよ」

あいつの話で、今まで碌ろくでもないこと以外があつただろうか。あまりの馬鹿らしさに相手をする気にもなれず、黙々と目の前のレポートを片付けることに没頭した。それでも、あいつは言葉を覚えた

インコのようにぺらぺらと話し続けた。

「小学生の頃は、虐めて悪かったって。もしかして、今でも根に持ってるのか？　こんなに謝ってるのに、お前は許してくれないんだな。あんまり執念深いと、女に嫌われるぞ。昔から変わらずに暗いから、今になっても彼女ができないんだ。おい、聞いてるか」

ふざけているのが見え見えの態度で、頭を下げた。

それにしても五月蠅い。^{ひんがし}

あいつの口にセメントを流し込んで、二度と声を発せないように、息すらできないようにしてやりたいと、何度願ったことだろうか。^{せんりょ}浅慮なことであると理解しているが、奴の声を聞いていると無性に苛々する。これはほんの一部の理由であり、苛々するのには、他の理由もある。その一つが就職が、それとも大学院への進学かという選択を迫られていることだった。どちらも拒絶したいところだが、そうはいかない。だからと言って、研究したくもないのに大学院へ進学する理由はないし、就職をするにしても勤めたいと思うような企業や職種もない。自分のすべきことは何なのかを考えるが、何一つ思い浮かばない。それこそが、今の僕を苛々させる一つの要因であった。

そして最も多くの原因を作っているのが、あいつが彼女の死を忘れているように思えることだ。もちろん、死んだと決まったわけではないし、あいつが忘れたという確証もない。しかし未だに、彼女の美しい、蠟人形のような小さな体は見つかっておらず、あれ以来あいつはあの子の話題を避けている。

もしかすれば、今でもあの子はどこかで苦痛に喘いでいるかもし

れない。あれだけの出血だったのだ、生きているなんてことは天地が引つ繰り返れば有り得るが、常識的に考えれば有り得ない。彼女は、死んだのだ。僕は最近になって、やっとその現実を、そして負を負えるようになった。

あの時の事件は、本当は殺人事件なのだが行方不明事件として処理された。あいつらによって彼女の目撃情報は捏造ねつぞうされ、警察の手は現場から遠ざかった。実際には、小学校の付近が事件現場となっているのに、警察は的外れな場所を搜索した。

僕は、それについて黙っていた。彼女を警察に発見されては、遺体が消えてしまつては困るのだ。あの子に、髪飾りを返せなくなつてしまふし、ごめんの一言も言えずに終わつてしまふ。さらには、解剖をされる可能性も考えられる。あの子が解体されるなんて耐えられない。例え返す相手が死体であっても、直接彼女に返し、謝罪することに意味がある。それは棺桶の中であつてはならないのだ。

僕はあの時から今まで、彼女のことを忘れた日はない。それどころか、紙のように薄っぺらく、髪のように細い日々を重ねるにつれて、愛しく想う気持ちは募る一方で、日に日に会いたくなつた。いつそのこと、化けて出てくれた方が良いとさえ思う。同様にあいつらへの憎悪も比例して激しくなつていた。あの時、黙って死んでくれていれば良かったものを。

あいつが彼女を隠した時から、ずっと探し続けた。しかし、どこを探しても見つからなかった。単純な場所には隠さないだろうと思ひ、少し離れた茂みの中や、運動場の隅に盛られた土の中を探してみたが、やはり発見には至らなかった。あいつを問い質ただしても、知らんふりをするだけだった。

最初は、教師たちによって駅前でビラが配られたり、マスコミに大きく取り上げられたりして世間で相当騒がれたようだったが、今ではそんな事件はなかったかのように平穏だ。それでも、親がいれば未だに騒ぎ立て続けるのだろうか、彼女に両親はいなかった。警察が捜査を打ち切ることに、誰も異議を申し立てることはなかった。それは、僕にとって好都合なことであった。これで、他人に発見される可能性はほぼゼロとなったのだ。心おきなく、ゆっくりと彼女を探し出すことができる。だが、未だに発見には至っていない。

「おい、聞いてるか。小学生時代からの縁じゃないか。ちよつとくらい聞けよ。男をあげるチャンスなんだぞ。気持ち悪いと言ったのは悪かった。な、許してくれよ」

二つ前の席から、耳を突くような甲高い声と、まるで喉に綿が詰まっているかのような低い声がする。

「そうだよ、縁だ。仲良くやろうぜ」

「縁は大事だ。手に入れたくても、なかなか難しいぜ」

縁、縁、縁。そんなもの、あつてないようなものだ。

あいつら 死体を運んだ男と、血の池に砂を被せた男だ は、あの事件以降から、事あるごとに僕に関わるようになっていた。中学までは校区の関係上、同じ学校に通うのは仕方なかったが、まさか高校、大学まで同じになるとは思ってもみなかった。わざわざ、あいつらの脳味噌が到底及ばないであろう難関校、それも、結構な距離のところにある高校と大学を受験したというのに。それなのに、あいつらはずいいてきた。というよりも、取り巻きの場合はついて来ざるを得なかったのだ。恐怖を刻まれた心は、脆弱なものだった。

ここまでついてきた意地だけは評価せざるを得ない。

ここまでついてくる理由も、あの時とは打って変わって親しげな理由も、ずっと関わり合いになっていく理由も解っている。彼女の死を誰にも話されたくないのだ。あいつの唯一の反抗因子であり、事件の目撃者である僕を常に自分の目の届く範囲に僕を置き、事件の話させないようにしている。全てを暴露されるという恐れがあるからか、小学生時代のように机を引っ繰り返したり、腹を蹴り上げたりするような真似は絶対にしてこない。

「なア、おい。これはな、彼女ができるチャンスなんだ。研究室の女の子も参加するんだ。男一人に対して、女一人。時間は二〇時丁度。場所は、H小学校の裏にある廃屋群。覚えているだろ？　そこで、その子らと何をしても構わない。ほら、憧れだったアレができるんだ。知ってるか。お前のこと、気になってる女がいるんだぜ。そいつとペアを組ませてやる。なあ、聞けよ。お前も、周りが男ばかりじゃ、人生灰色ってもんだらう？　だからよ、人生に一点の朱を投じてやろうと言ってるんだ。どうだ、悪くない話だらう」

灰色の人生に一点の朱を……か。珍しく、文学的な表現をするではないか。あいつは、小学生時代からは大きく変わったのだらう。きつとあいつは好意を抱いていた彼女の死を忘れ、多くの恋をして、能天気生きてきたからこそこれだけの変化が現れたのだ。その点、僕は何の変化もない。容姿ばかりが老けていき、心の中はいつも少年で、あの時の空がそうだったように、延々と泣き続け、そしてこれからも泣き続けるだらう。

心の成長が望めなくとも、彼女の死を忘れる気は毛頭ない。それを忘れる時は、彼女への償いが終わった時だ。しかし、今の僕には償いの手段が思い浮かばない。例えば、自殺をしたでしょう。それ

で罪が償われたと思うのは、明らかな自己満足だ。理想とする贖罪^{しゆくわい}は、彼女と同じ苦しみを味わうこと。それしかない。あいつを殺すことでさえ、償いには成り得ない。しかし、少しくらいは変わってみても良いかも知れない。

「良い。参加する」

そう返事すると、あいつらは揃っていやらしい笑い声を上げた。

そして、無人島に取り残された人間を食おうとする鯨のように、周囲をくるくると回り始めた。また、僕を笑い者にする気なのか。だとすれば、許せない。

「お前も、やっぱりしたかったんだな」

あいつは、馴れ馴れしく一人一人に割り当てられている机に尻を乗せた。乗っていたシャープペンシルが、乾いた音をたてて、白くぬらぬらと光るリノリウムの床に落ちた。あいつは両方の口角を上げ、目を薄い三日月にして笑っている。

「何の話だ」

「研究室の女の誰かと、いや、あの茶髪の子とたくて仕方がなかったんだろ。おっと、解ってるって。しっかり廃屋にはゴムを置いておくから、持って来なくて良いぞ。着け方くらいは解るよな？ ああ、それくらい知らないようじゃ、情けないよな。ん？ 未経験なのに、どこで使う機会があったんだ」

腹立たしい物言いだ。しかし、あいつの言うことは大まかにだが正解だ。しかし、一っだけ事実と反する部分がある。僕はあの子と結ばれたかったのだ。あいつの口から飛び出した茶髪の女だけでは

なく、他の誰とも、一つになりたくない。確かに、性交をしたいという願望は抱いているが、彼女のあの美しい肢体を思い起こせば、そんなものは泡となり消えてしまう。生きてさえいれば、いずれ襲うつもりだった。犯罪になっても構わない。僕の性器が彼女の性器を貫く瞬間、きっと凄まじい快感がはしるに違いないと、確信していた。だが、今はもう叶わぬ夢である。しかし叶わぬと解った今でも、彼女の流線型の体軀たいくを思い起こすと、どうしようもなく勃起する。僕は、ロリータコンプレックスなのかもしれない。

「な？　したくて仕方ないだろ？　できれば誰でも良いんだろ？　お前だって男だもんな。一人前じゃねえか」

煽おだてるような口吻を弄し、粘っこい笑みを浮かべた。

「違う」

「嘘をつくなよ。もしかしてお前、まだあの子のことを考えてるのか？　あの子としたいのか？　もう、いい加減に忘れてしまえよ。あの子よりも、茶髪の子の方が可愛い。いや、比べることすら馬鹿らしいな。俺も今じゃあ、あんな女のどこが良かったんだと心から思うよ」

嘘じゃない。お前に何が解るといふのか。僕を救ってくれていた神がどれだけ大きな存在であつたか、下品なあいつには、その欠片かけらでも理解できるはずがないのだ。いつもクラスの頂点にいて、周囲を支配していた奴と、角に溜まる埃同然の存在感しかない僕。どう考えても、同じ世界が見えていたはずがない。彼女がどういう人間であつたか、その映り方も天と地ほどの差がある。

「嘘じゃない。それと、あの子を侮辱するな」

怒りを燃え盛らせて顔を真っ赤にしている僕とは対照的に、あいつはにやりと粘着質な笑みを浮かべ、全て承知しているという風な顔をした。そして後に、諭すように言った。

「男はな、誰でもしたいんだ。欲望に忠実になれよ」

「お前と一緒にするな。年中発情している分際で」

「じゃあお前は違うのか？」

あいつは挑戦的な口調で言った。

「違う」

「ほお」

まただ。また、あの嗤いだ。人を見下した、あの下卑た嗤い。その作り物の笑顔の裏に、どんな考えが渦巻いているのか、表面上では僕を誘いながら、いつ何時後頭部を石で打たれるか分かったものではない。奴にとって、僕の弱みを握ることは、人生を賭けてでも成し遂げたいことなのだろう。そうしてまでも、彼女の死を隠蔽したいのだ。

今までも、幾度となく嵌められそうになった。時には見知らぬ男らに囲まれて殺されそうになり、時には暴走した車に撥ねられそうになった。けれども、奇跡的に僕は死なずにいる。神様なんて存在は信じていないが、きっと僕には何らかの守護がある。もしかすればそれは、あの子なのかもしれない。怪我一つしなかったことは良いとして、これらは全てあいつの誘いに乗った時にだけ起こった。

つまり、今回の肝試しも何か裏があると踏んで良いはずだ。廃屋に誰かを潜ませておくか、それとも、死角にビデオカメラを設置して、僕とどこかの女との性行為を撮影して、それを外部にばら撒くと脅すのか。どうしてもあいつは彼女の死を知る、自分に反抗的な存在を消し去りたいらしい。そんなことをせずとも、誰にも話しはしない。一度話せば、堰^{せき}を切ったかのように、思い出が流れ出てくるだろう。それでは、僕の中から彼女がいなくなってしまう。

「丁度良い。じゃあ証明してみろよ。暗い廃屋で、女と二人きり。何の邪魔もない状態で、どれだけ本能を抑えていられるのか。言っとくが、お前のペアは相当な淫乱だぞ。何度か味見させてもらったが、最高の女だよ、あいつは。男なら誰でも良いし、その中でも童貞を好んで食うんだ。絶対にお前は襲われる。性病には感染してないから、安心しておあがりなさい」

くつくつと、あいつが嗤った。下品。

「良いさ。やってやる。本能に逆らうことは、お前と会話することよりも簡単だ」

「見ものだな。せいぜい頑張ってくれよ。時間は二〇時、場所はH小学校付近の廃屋群。これだけは忘れるなよ」

それだけ言うと、あいつは研究室から出て行った。それに続いて、過去に彼女を運んだ二人も去っていった。時計が時を刻む音と、冷房の音だけが室内を満たす。

冷静になってみると、あいつの挑発なんて受ける必要はなかったのだ。いや、受けるべきではなかったのだ。

一時の感情でむきになってしまった自分を恥じ、あの時の彼女に
したように毛を掴み、引き千切った。そのまま顔を伏せていると、
研究室の扉が軋みながら開いた。生温い風が冷たい空気を裂き、肌
を撫でた。

「あ、君、いたんだ」

扉の方を一瞥^{いちべつ}すると、肩まで伸びた、栗色をしている髪をさらりと
風に靡^{なび}かせ、少し濁って見える黒い眸をこちらに向ける、小動物
のような栗鼠^{りす}みたいだ。女がいた。こいつが、あいつの言っ
ていた女だ。何でも、僕に気があるとか。あいつの言う通りに気が
あるとすれば、さっさと首を吊って死ねば良いと思う。あの子以外
は女ではないし、存在価値もない。だが、これはあくまで僕の主観
だ。事実として栗鼠女はこの研究室のアイドルのような存在だ。あ
いつのように力で勝ち取った友ではなく、本当の友が彼女の周囲に
は掃いて捨てるほどいる。その人望だけは評価せねばなるまい。

「ああ」

生返事で応える。握っていた髪が床に散った。

「ね、ね。来週の肝試しの話、聞いた？ 聞いたわよね。私の友達
も皆乗り気でさ、今から楽しみだって言ってた」

栗鼠女は僕の背後に立ち、青白い腕を首に絡ませてきた。柔らか
いが、決して温かくなく、死体のようだった。こいつは、本当に生
きているのかと疑問に思う。ふと、死んだ彼女の体温を思い出した。
温かった。柔らかかった。甘い香りがした。こんな女とは、比べ物
にならない位に、女性だった。だが、この女にはその要素が何一つ
ない。

「ああ」

「ああ、って。相変わらず素っ気ないわね。私たち、肝試しのペアらしいじゃない。私、楽しみだわ。君って、臆病そうだから、私が守ってあげるからね」

かいぎやく
諧謔を弄したつもりだったのだろうか。何も面白くない。

「そりゃあどうも」

力強く栗鼠女の腕を払い除ける。僕の腕に、臭い香水の匂いがついてしまった。

さつさと寮に帰って、布団に包まっていたい。この女とずっと関わっていると、頭がどうかしてしまいそうだ。あの子の思い出がどんどん薄れて、穢けがれていくように感じる。

しかし、この女からは性的な魅力を異常に感じる。決して見た目は美人ではないのだが、割と整った顔立ちをしていて、胸も大きく突き出し張りがある。シャツとズボンの合間から見える、腰の周りについた程良い肉が性的興奮をそそる。だからといって、あの子の足元にも及ばないのだが。

「なあに？ 人の体をじろじろ見て。もしかして、したいの？」

「そんなわけない」

栗鼠女は言い分を無視して、人差し指を柔らかかそうな唇に当て、

「今は駄目よ。肝試しの時なら、させてあげる。廃屋で美女が野獣に犯される……。何て面白い展開なのかしら。うふふ、私も、今から肝試しが楽しみになっちゃった」

と、自信と誘惑に満ちた声で言った。

今まで、この女をそうやって性的に意識したことはなかった。単に関心がなかったのだ。しかし、こうやってまじまじと見てみると、女性の体というのは形容し難い魅力を孕んでいる。思わず、一心不乱に襲いたくなってしまふ。

「あら、飢えた狼の目をしているわ。やっぱりしたいの？」

女はシャツと一緒にブラジャーを捲り、ふつくらと膨らんだ胸を見せつけてきた。淡い桜色した乳首が姿を見せると、自然と呼吸が荒くなる。心臓が飛び跳ね、まるで生物のようにのた打ち回った。こんなこと、いつ以来だ。自分に問う。そうか、あの子と初めて言葉を交わした時以来の興奮だ。

「ちょっとだけ、好きにして良いよ」

その言葉に、理性は吹き飛んだ。桃色のそれに吸いつくと、赤ん坊に戻ったかのような錯覚に陥った。それから、力一杯に、強く、強く胸を揉みしだいた。少し弾力のあるスライムを触っているかのような感覚だ。本能に従って滅茶苦茶に揉み続けていたのだが、

「痛い。でも」

と、頬を紅潮させて女が言った。でも、の後に続くだろう言葉は想像に易い。その表情と艶めかしい声に僕は興奮を抑えきれなくな

り、彼女を床に押し倒して、その柔らかい唇を、かさかさに乾いた唇で塞いだ。女が、小さく喘いだ。手をズボンのボタンに持っていた。こうとした時、女がそれを制止した。

「待つて。やっぱり続きは、来週、じゃあ駄目？　ここじゃあ、いつ誰が来るか分からないもん。ね、来週にしよう」

こんな時でも、女は冷静なのか。静かに、もう一度キスをしてから、ぽんぽんと背中を叩いた。退けということだろう。僕が彼女の上から退くと、ぱたぱたと埃を叩き、微笑みかけた。

栗鼠女は「じゃあまた来週ね」と言い残し、鼻唄を歌いながら、きつい香水の香りを漂わせたまま去っていった。

「なんてことを」

小さく唸り、深く後悔した。どうして、あんな動物の本能をむき出しにしてしまったのだろうか。これでは、あいつと変わらないではないか。それに、さっきあいつに言ったことと早々に矛盾している。僕は、何を考えているのだ。これでは、僕はあいつの傀儡かいらいか何かではないか。情けない気持ちと、あの子への罪悪感が入り混じり、凄まじい背徳を覚えた。

まさか、性欲というものがここまで強いとは考えたこともなかった。女性の胸を見ただけで、あそこまで理性が吹き飛ぶなんて。今までに自慰は何度も経験しているが、それは全てあの子を想いながらした。書店に置いてあるようなポルノ雑誌や、アダルトビデオを見たこともない。興味が一切なかったといえは嘘になるが、ただ、あの子の裸体を想像して自慰に耽ふけるだけで十分に満足していた。よく考えてみれば、今までに母親以外の女性の裸体を見たことが、

一度もなかったのだ。だから、予想だにしない勢いの性欲が顕在化したのだろう。

そんな瑣末さまつなことを頭から追いやり、研究室の窓から外を見やると、さらさらと雲が流れていた。鋭い日差しが雲間から射し込み、大地を貫いている。

性欲に勝てるのか。いや、あの子の為にも、勝たねばならぬ。

あの子こそが全てだと、証明するのだ。

淡い光の射し込む研究室で、自分に問い、自答した。

僕の心とは対照的に、世界の一切が青かった。

あの日から一週間後の十九時過ぎに、僕は数年ぶりにI駅のホームに降り立った。相変わらず人が多く、下車した時には、一面が歸路を辿る人たちと熱気で覆われていた。

5

料金分の切符を改札に通し、駅からショッピングセンターへ繋がる歩道橋を渡って、そこからさらに階段を下って、親が夕食を用意しなかった時によく通った、定食屋の前へ出た。本当にこの町は何も変わっていない。あの子がいなくなった時から、ずっと。この代わり映えのなさを思うと、どこからともなく、無邪気な笑い声をあげながら彼女が現れるのではないかと、そんな妄想を抱いてしまう。

小学生の時から大して賑わいを見せていない商店街は、今ではほとんどがシャッターを下ろしていて、閑散としていた。赤錆の浮いたシャッターが、どこことなく、商店街を不気味なものにしている。薄暗さも相まって、化け物でも物陰から飛び出してくるのではないかと思ってしまう。

商店街を抜け、まずはそこから暫く行った所にある図書館を目指す。その図書館は思い出深く、あの子と一緒に勉強をしたことがある場所だ。と言っても、それは授業であり、あの子は隣にいただけだ。僕は授業時間の四十五分全て、彼女を見つめることだけに割いた。幸せだった。

そういえば、と思い出を引き出しから引つ張り出す。

あの子と初めて言葉を交わしたのも図書館だったか。鉛筆を拾ってもらった。たったそれだけのことで醜い僕に話しかけてくれた。勝手な想像だが、きっとあの子も話しかけるタイミングを探していたのだと思う。

それ以前は僕自身の勝手な断定と妄想で、あの子は他のクラスメイトたちと同じく敵だった。しかしそれ以降、あの子は僕にとって特別な存在になった。図書館にいたその時は二言三言交わすだけであったが、それからあの子は積極的に話しかけてくれた。僕は恥ずかしさと興奮のあまりほとんど言葉を発しなかったので、大概はあの子が自分自身のことを語っていた。自分に親はいないこと、髪飾りをプレゼントしてもらったこと、一日の大半を勉強に費やしていること、そして将来は孤児を保護する施設を展開したいということ。あの子は、様々な事柄を話して聞かせてくれた。あいつが途中で邪魔をしてくるので決して長い時間ではなかったが、僕はその時間に堪らない愉悦を覚えた。

今でこそそうでもないが、はつきり言って、僕の容姿は最低だ。腫れぼったい目に、濁った眸、雀斑だらけの肌そばかすに丸い豚のような鼻が乗っている。髪を整えたことなんて一度たりともなかったし、風呂に入っているはずなのに異臭がした。今思えば、十分虐められるに値する人間だったのだ。それなのに、あの子は何の隔たりも感じさせることなく、明るく話しかけ、幾度となくあいつから救ってくれた。あの子は、僕にとって希望そのものだった。その希望がまさか絶たれてしまうなんて、思いもしなかった。まるで太陽が何の前触れもなく消え去ったような気がした。

あの子が消えてからの生活は、不思議と何の苦もなかった。あいつは今までの暴力行為がなかったように接してきたし、クラスメイトもそれに従ってか作り物の関係を構築した。あの子の行方不明で激務に追われていた担任は一つ肩の荷が降りて、ほっとしている様子だった。しかし、そんなものは表面的なものでしかなく、ただ単にあいつは僕の機嫌を損ねたくなかったただけだ。介護のような優しさに、毎日のように吐き気を催した。

思い出に浸りながら図書館前を横切る時、多くの子供たちがわいわいと騒ぎながら、そこから出て行く姿が見えた。閉館時間がもう直だからだろう。自然と、僕は無意識に子供の集団からあの子の姿を探した。もちろん、見つかるはずがない。

図書館の裏にある細い通りを抜けて行くと、目の前に母校であるH小学校が見えた。懐かしい。腹の底から煮え滾るような憎悪と、凍てつく悲哀、胸の躍る気持ちが同時に湧き起こる。

小学校の正門前で、ふと足を止める。薄闇に包まれた校舎の窓に、白い影が映った。彼女の霊かと思ったのだが、白い影の正体は、小学校のずっと向かいにあるアパートから漏れ出す光が、校舎の窓に反射しただけのものだった。

小さく溜め息をつき、校舎の裏側へ回る。そこが、あいつの指定した廃屋群だ。そこは昔から立ち入りが禁止されており、工事用のフェンスが何重にも重ねられ、それらは鎖でしっかりと固定されている。大人連中はそれで完全に封鎖したと思っているのだろうが、それでも、抜け道は存在した。この小学校に通っている子供しか存在を知らないと言言できる。あいつらは、放課後になると決まってそこで遊んでいた。僕は、一度もそこへ入ったことがない。だが、抜け道の存在だけは知っている。

ちかちかと明滅を繰り返す街灯の下で、三人の男と、四人の女が談笑していた。どうやら、僕が最後だったらしい。

「よう、よく来たな。今日は良いものが見られるぜ」

良いもの？ 一体何の話だ。

暗くてよく見えないが、きつと顔はいやらしく笑んでいることだろう。その隣で、栗鼠女が白い歯を瑞々（みずみず）しい唇の隙間から覗かせて笑っている。

今日、あの子を犯すのかもしれない。そう考えると、また勃起した。抑えられない衝動。だが、抑えなければならぬ。理性が本能に勝つよう、仕向けなければならぬのだ。

「それじゃあ、俺主催の肝試しを始めたいと思いまあす！」

甲高い声であいつが言うと、皆が一樣に拍手をし始めた。僕は、黙って栗鼠女を見つめる。丸い黒い眸が街灯に照らされて、ぬらぬらと輝いて見えた。

「何と、昔からここにはお化けが出るといふ噂があります。そのお化けの恐ろしいこと」

あいつの取り巻き二人が、うんうんと頷く。そんな噂、一度たりとも聞いたことがない。単に僕が知らないだけで、僕以外の人間は皆知っていたのかもしれない。そう考えると、堪らなく虚しい。

「どんなお化けなんですかあ？」

長髪の男が、あいつに問う。

「良い質問だ」あいつは咳払いを一つして「ここのお化けは、生前の恨みがとても強く、今でも生きているかのように実体を持って彷徨^{さまよ}っている。そして、痛い、痛い、と言いながら、ずうっと恨み続けている。自分を殺した相手を。そして、そいつに見つかったら最後。怨念で殺されてしまうのさ」

きやあ、と女連中が不愉快な声で叫ぶ。栗鼠女は、最初に見た時と変わらぬ明るい表情で、あいつの話に聞き入っている。

「ルールはどうなっているの？」

栗鼠女が問うた。

「廃屋群のどこかにある目印見つければ、それでオーケーだ。別に持ち帰らなくても良い。それと、鍵が壊されている廃屋以外には近寄らないこと。それ以外のルールは何もない。時間制限はないけど、後が支える^{つか}から、早めにしてくれ」

目的の物を見つけても、持ち帰らなくても良いとは、どういうことだろう。

「廃屋へ入って行く順番は？」

角張った顔の男が、くぐもった声で訊いた。

「順番ね。まず、俺とこいつのペア、そして角張男と赤毛の君、次は長髪のお前と金髪の君。最後は、気持ち悪い奴と、麗しい姫君だ。

これは勝手にこちらで決めさせてもらったけど、異論はないよな」

ありませーん。皆が口を揃えて言った。

「じゃあ、早速開始するのでしょうか。ああ、ぞくぞくする。おっと、最後に一つ。今日がお前らにとって最良の一日となりますように」

あいつは無意味に思える言葉を吐くとペアの女と手を繋ぎ、そこから少し離れた所にある抜け道から中へ入っていった。それから間もなく、女の甲高い叫び声上がり、いやらしい笑い声がした。どうやら、存分にお楽しみのようだ。

あいつのペア以外の男女は、そこでキスをし始めた。そんな中で、僕と栗鼠女は、黙って夜空を眺めていた。少し赤みのかかった月が、地上に惜しげもなく光を降り注がせている。このような見返りを求めない月は、あの子にそっくりだ。そうか、もしかしたら、あの子は死んで、輝かしい月の一部になったのかもしれない。そう考えると、何だか救われる気がした。あの子も、そして僕も。

結構な時間が経過した。月は徐々に登っていき、薄闇がかっていただけの空間は、すっかり闇に飲み込まれてしまった。一体、あいつらはどこで、何をしているのか。あまりに時間をかけ過ぎではないか。

僕の記憶が正しければ 学校内部から敷地内は見渡せた この廃屋群は四棟の廃屋で構成されている。敷地内は雑草だらけで、歩くのにも苦労しそうだが、それでも廃屋を巡るのに大した時間はかからない。さらに、あいつは「鍵が壊されている廃屋以外は入らないこと」と、そう言った。だとすれば、最低でも一つは鍵が壊さ

れていない場所があるはずだ。ならば、回るべき廃屋は最低三棟と
いうことになる。たったそれだけの廃屋を回るのに、これだけ時間
がかかるものだろうか。

様々な憶測が、頭の中を駆けずり回る。あいつらが、誰かに襲わ
れて帰って来られないという線。次に、あいつらが未だに目的の物
を手に入れられていないという線。可能性が低いが、敷地内で迷子
になっている線。最後に。

と、丁度それを考えようとしていた時、あいつのペアは帰ってき
た。気の所為か、あいつは少しやつれ、女の方は肌がつやつやとし
ていて、機嫌が良い。

やはり。と僕は思った。あいつらは、廃屋の中で性行為に勤しん
でいたのだ。そう考えれば、時間がかかることにも頷ける。この企
画は肝試しの名を借りた、淫行を行う為の企画だ。たまには青姦と
しやれこもう、というような考えだ。恐らく、ここに僕らを置いて
おくのは見張りの為だろう。そういえば、あいつは「しつかり廃屋
にはゴムを置いておく」と、そう言った。そうだ。あいつは、何も
僕の為にこの舞台を設定したわけではない。自分たちも使うから、
お前にも使わせてやると、そういう話だったのだ。

あいつらが去った後、角張男と赤毛の女のペアが、抜け道を通っ
て敷地内へ入って行った。そして、あいつらのペアと同じくらいの
時間を使って、じっくり性交を楽しんだ後、二人とも上機嫌で出て
きた。街灯に照らされて、てらてらと汗が輝いているのが視認でき
た。そして、長髪の男と、金髪の女も、同じことをした。たつぷり
と楽しんだようだった。肝試しの要素がどこにあったのか知らない
が、皆が口々に、怖かった、気持ち悪かったと言っていた。性交以
外に、何かあったというのか。

そして、とうとう僕らの番が回ってきた。他のペアは、既にどこかへ行ってしまった。

「じゃあ、行こっか」

栗鼠女はそう言うのと、懐中電灯を手に持ち、強引に僕の手を引っ張った。女の柔らかい手を握り、あいつらと同じく抜け道を通って敷地内へ入った。

敷地内へ入ると、青臭い匂いが僕らを包み込んだ。嫌いな匂いではない。僕と栗鼠女は、背丈ほどに伸びた雑草を掻き分けながら進んで行った。途中、何かの枝に腕をかけた。

「大丈夫？」

「大丈夫」

ぶつきらばうに答える。

「ちょっと待ってね」

栗鼠女はそう言うのと、己の唇を僕の腕に押し付け、血液を吸い出した。柔らかな唇が腕に吸盤のように吸いつき、気持ち良い。暫くの間そうして、バックから絆創膏を取り出して、貼ってくれた。

その仕草があまりにも可愛らしく、理性は吹き飛ぶ寸前だった。このまま押し倒しても、罰は当たらないのではないか。そんな思いが、体を蹂躪じゅうろうしていく。しかし、そんな汚れた思いを栗鼠女は悟ったのか、僕の唇に人差し指を当て、

「ちゃんと、目的の物を手に入れてからね」

と、優しく、包み込むような声で言った。この時ばかりは、栗鼠女の判断に感謝せねばならなかった。あのまま抑える者がいなければ、きっと本能に負けていた。

一つ目の廃屋が見えてきた。鍵は壊されている。平屋のようだが、壁に貼り付けられている板のいたところが風雨に晒されて、腐り、破れ、どす黒く変色している。

「まずはここからだね」

栗鼠女が、無邪気な笑みを浮かべる。ちつとも怖がつていないようだ。僕はというと、淡い月灯り照らされた廃屋と、じいじいいと啼く虫なの声、そして草の鳴る音に怯えていた。何故か、心臓が異様に高鳴っている。しかし、立ち止まっている暇はない。

錆びたドアノブに手をかける。かさかさとしていて、ひんやりとした感触が伝わる。ノブを回し、扉を開く。木材の軋む音が、闇に響いた。

中は、当然のように真っ暗だった。栗鼠女が懐中電灯の光で闇を切裂く。おぼろげに、内部が見渡せる。手前に一間、そして奥に一間。どちらも和室だ。転倒した箆たんす笥からぼろ布が出ていて、畳はずたずたに引き裂かれている。天井には大きな蜘蛛の巣がかかり、蜘蛛が獲物を貪っていた。簡単に見た感じでは、ここに目的の物があるとは思えない。

ふと、光の先に黒く光るものが目に付いた。あれは ビデオカ

メラか。やはり、あいつは性交を撮影する気でのいるのだ。しかも、それは天井の隅に設置されていて、取り外すこともできなさそうだ。手前の部屋は物が散乱していて、とてもではないが使えない。それに比べて、奥の間はまるで最近手を触れたように片付いている。明らかに、そこでやれと、そういうことだ。

ここに目的の物はない。ならば、ここへ留まる理由はない。

「ないみたいだね。次行こうか」

栗鼠女もそれに気づいたらしく、次の廃屋へ向かおうと促した。黙って、それに従う。

次に向かった廃屋も、さっきのそれと何ら変わりはなかった。ただ、そこは、さっきよりもっと荒れていた。そこで愛し合うなど、考えられない。目的の物も、見つからなかった。あったのは、前の廃屋と同じような場所に設置された、赤いランプの点灯するビデオカメラだけだった。それは隠すように置かれていたが、すぐに発見できた。

待ち時間で考えたように、一つだけ鍵が壊されていない廃屋があるのならば、消去法で次の場所に目的の物があるということになる。やっと、この性欲の地獄から開放される。

三つ目の廃屋は、まだ他の二つと比べて幾分か綺麗に見えた。しかし、所々が黒く変色して、やはり部分的に板が破れている。その屋根の向こうに、恐らく鍵が壊されていないだろう二階建ての廃屋が頭を覗かせている。あれが、鍵の掛けられた廃屋だろうか。屋根の少し右側に月があり、何とも幻想的な雰囲気醸している。僕は何故か、その廃屋を見ていると胸が躍るようだった。幼い頃特有の

冒険心というのだろうか。不安と期待が入り混じり、行け、と、行くな、が交互に頭に浮かぶ。もし、目の前の廃屋に目的の物がなければ必然的に入ることになるのだから、今は気に留める必要はないだが、それにしてもこの気持ちの高揚は何なのだろうか。分からない。廃屋を見ていると、どうしようもなく心臓は高鳴る。

「ここにあるのかな」

彼女は小悪魔のような微笑を浮かべ、自ら率先して中へ入って行った。僕も、慌てて後を追う。

僕を無視して、どんどん彼女は奥へ入って行く。まるで、早くしよう、そう無言で言っているかのようだ。不安定な板張りの玄関を抜け、畳の上を這っているゴキブリを踏み潰して先へ進んでいくと、栗鼠女が懐中電灯をこちらに向け、にんまりと笑っていた。閃光のあまりの眩さに、目を瞑る。

「ほら、あつたよ。きつとこれだよ、目的の物」

薄眼を開けて彼女の手元を見ると、手には封の切られていないコンドームがあつた。これが目的の物とは、下品なあいつの考えそんなことだった。その場で使用するのだから、持ち帰らなくても良いと言ったのだ。それにしても、ここまで何も怖いところなんてなかったし、ましてや気持ちの悪いことなんて何一つなかった。あいつらの言っていたものは、何だったのだろうか。ただ単に、性交をしていないということを証明したかっただけなのか。

栗鼠女が懐中電灯のスイッチを切る。途端に、部屋の中は薄闇に包まれた。衣擦れの音が聞こえる。彼女が、服を脱いでいる。薄眼で、彼女を見やる。張りのある乳房が、淡い光を纏い、薄く光って

いる。

駄目だ。負けては駄目だ。

必死になりながら本能に逆らおうとしたが、誘蛾灯ゆうがとうに誘われる虫のように、月灯りを頼りにして、彼女の元へと体は向かう。前へ立つ。両方の乳房を、両手で鷺掴みにする。小さな喘ぎが聞こえる。適当に揉みしだいた後、ぴんと立った乳首を夢中になって吸った。それから彼女の唇を唇で塞ぎ、激しく舌を絡ませ合って、互いの唾液を交換した。

何か、光った気がする。蜘蛛の巣が絡み合う天を仰ぐ。すると、天井の隅に、さっきまでの物とは明らかに違う、小型のカメラが巧妙に隠され、設置されていることに気づいた。

「どうしたの？」

微かに顔を紅潮させているのが解る。

「できない」

ここで、行為に及ぶわけにはいかない。

「行こう」

え、と、戸惑いを包含した声が聞こえたが、強引に彼女の手を引っ張って、そこを出た。途中、何匹もの虫を踏み潰した気がする。懐中電灯もなしに突っ走って行き、二階建ての、一際大きい廃屋の前へ立った。背後から、荒い息遣いを感じることができる。

「ちょっと、どういうこと？」

明らかに不機嫌な女の声。それもそうだろう。体に火をつけておいて、それを中断して勝手に走りだしたのだ。彼女にとっては、欲求不満も良いところだろう。

「あそこには、カメラがあった」

「あら、君でも見られてするのは嫌なんだね。でも、この廃屋は駄目でしょ？ ほら、鍵がかかっている」

確かに、そうだ。この二階建ての廃屋は、他の物と違ってしっかりと鍵がかけられている。だが、そんなものは壊してしまえば意味はない。手頃な大きさの石を手に取り、何度も鍵に打ちつけた。がち、がち、と、金属の高い音が響く。あまり大きな音を立てることは得策ではないが、それどころではない。どうしても、この廃屋の中が気になって仕方がないのだ。これこそが直感というのだろうか。いや、あいつの言った「今日は良いものが見られるぜ」という台詞が胸に引っかかっているのだ。ここに来るまで、これといって目立つものはなかった。見逃しているのかもしれないが、ここに『良いもの』がある可能性が高いと踏んだ。まるで悪魔に、中身を見なければ後悔する、ルールなんて無視してしまえと囁かれているようだった。もう、栗鼠女のことなんてどうでも良い。この廃屋の中が気になって仕方がない。

石を打ちつけようとするが、暗くて上手く狙いが定まらない。

「ライターある？」

「どうぞ」

バックの中から緑色のライターを取り出すと、それで鍵の周辺を照らしてくれた。僕は、そこで初めて栗鼠女が上半身裸であることに気づいた。豊かな乳房の所々に、赤い線が引かれている。さすがにこれは、申し訳ないことをした。

「ごめん」

「良いよ。それより早く壊しちゃって」

何度も、何度も鍵を石で打ちつける。何か、心に影ができた気がする。無心で、打ち続ける。すると、そのうちに、南京錠がぼりと草の上に落ちた。この鍵に、何か違和感を覚えた。何か、簡単に外れ過ぎやしないか。

「行こうよ」

ぐいと、彼女が手を引く。柔らかい。鍵なんて、どうでも良い。早く、早く。

扉を開くと、埃の匂いがその辺一帯に広がった。思わず咽返る。咳が止まらない。周囲を見回すと、何か違和感を覚える。何か、得体の知れない音も聞こえる。微かな腐臭がする。これは何だ。一体ここには何がある。

やはり、何か、おかしい。

彼女が手を引き、どんどん奥へ誘われていく。突然唇を奪われ、押し倒される。やはり、何かおかしい。何だ、この違和感。生物のようにうねうねと動く舌を絡ませてくる。気持ち良い。変だ。何

の音だ。ズボンの上から、股間を摩ってくる。この音じゃない。この廃屋は、あらゆるものがおかしい。何だ、この違和感は。

そうだ。

「待ってくれ」

違和感に耐えられなくなり、行為を中断させる。今思えば、この時行為を中断できて本当に良かったと思う。あの声がなければ、一時の性欲に負けて取り返しのつかない結果になるところだった。

「何だよ。ここにはカメラもないし、誰も来ない。安全、安心なのよ。もしかして、今になって萎えてきたとか言うんじゃないでしょうね。意気地なし」

「黙れ」

静かに、彼女を威圧する。

「上から、何か聞こえないか？」

「冗談はやめて」

女の額から、玉のような汗が落ちる。

「冗談じゃない。そもそも、この廃屋はおかしくなかったか」

「何がよ」

栗鼠女が当惑したような顔で問う。

「何でここにだけ鍵がかかっていたんだ。他の廃屋には、一切なかったのに。しかも、ここにかかっていた鍵は比較的新しく見えたし、あんなに簡単に鍵が外れるのか？ それに、さっき気づいたが、埃が溜まっていない部分がある。ということは、最近ここに誰かが侵入して、誰にも中へ入られない為に鍵をかけたと考えられる。いや、かけているように見せたただけだ。つまりダミーだ。ここには普通誰も立ち入らないから、ダミーで十分だとその誰かが考えたんだろう」

栗鼠女は言葉を失ったようだった。丸い二つの脂肪の塊を垂らしながら、茫然と聞き入っている。

「じゃあ、何があるって言うの」

「分からない」

静寂に包まれた空間に、微かではあるが聞こえる。呻き声だ。それこそが、ここに入った時に感じた違和感の一つだった。夜風に乘って聞こえてくるそれは、耳に入るだけで全身が総毛立つようだ。背に大量の虫が這っているかのよう、ぞわぞわとした感覚がある。この声の主が、男か、女か分からない。そもそも、これが人間のものであるかどうか、声であるかどうかも判然としない。

やはり、この家には何かあるのだ。

「行け」

何者かに、そう命令された気がした。

悪魔に命ぜられるがままに、体が動く。

「上か」

押し掛かっている彼女を撥ね退け、二階へ続く階段へ向かう。

「ちょっと待つて。私も行くから」

服に付着した埃を取ることも忘れて、玄関の方まで戻って行った。玄関前に、所々穴の開いた、薪をくべた後の色をした階段があり、それが光の射さない二階へと続いているのが見えた。

一步、階段に足をかける。ぎし、と軋む。埃が舞う。う、と、苦しさに喘いでいるように思える声。左足を二段目に置く。何かを踏み潰したような、例えるなら、スナック菓子を潰したような感触。三步目。この段はやけに柔らかい。まるで、あの子の素肌のように。四歩。声が、大きくなってくる。何か、言葉を発しているのか。五。栗鼠女が止めようよ、と言う。黙っている。六。やはり、声は錯覚ではないし、臭いも。今、はつきりと聞こえる、臭う。

階段を登りきると、凄まじい腐臭が鼻腔をついた。まるで死体が転がっているのではないかと疑ってしまうほどの悪臭に、思わず鼻

を手で覆った。そのまま辺りを見回すと、目の前に大きな窓が見えた。どうやら、ここは二階というわけではなく、屋根裏部屋のようなものなのだろう。窓から射し込んでいるはずの月光はなく、窓枠と、外に広がる夜空しか見えない。今、月は雲に隠れている。

何かが、呻いている。聞くからに苦しそうだ。声のする方へ体を向ける。何も、見えない。足元に注意しながら、ゆっくり進む。痛い。確かに、それはそう言っている。だとすれば、暗闇に潜んでいる何かとは、人間なのか。いや、動物の呻きが、そう聞こえるだけかもしれない。しかし、こんな鍵のかかった場所に、動物が侵入できるのか。できないことはない　　か。

「ねえ、何があるの。暗くて何も見えない」

栗鼠女を無視して、耳を澄ませながら、一步、闇へと進む。体が黒に侵食されていく。何だか、このまま自分が消えてしまうのではないか、というような妙な錯覚に襲われる。胃が、鉛を呑みこんだかのように重い。何か、見てはならない物がこの闇に紛れている。そんな気がしてならないのだ。理性は行けと命令している。本能は、やめろと制止する。どうするのだ。好奇心が、背中を押す。行け。やめろ。行くんた。行ってどうする。ほうら、闇の先には面白いものがある　　。

黒に身を投じる。何かを足で踏んだ。また、虫か。違う。ぐにやりとしたような感覚。そう、ガムでも踏んだような　　不快感がある。足を上げると、靴に溶けた飴玉のようにねとついている何かが付着しているのが分かった。どうやら、栗鼠女もそれを不快に思ったらしく、何これ、と、冷たい声で言っている。

月光が、雲間から射し込み始めた。徐々に、闇が裂ける。足元で、

琥珀色をした粘液が、池を作っている。その池は未だ黒を纏う先へ続いている。鋭く柔らかな光が、細い道を作っていく。そして、粘液の池の先に。

「ひッ」

栗鼠女が短い悲鳴をあげ、その場で尻もちをついた。

風が窓を叩き、がたがたと叫ぶ。

「これは」

月光の示す先には、表面が焼け爛^{ただ}れて赤黒く変色し、ねっとりとした琥珀色の粘液に体が包まれている人型の生物がいた。その体からは怪しげな黒煙が上がっており、それが悪臭の原因だと思った。それは辛うじて人間としての体を残しているが今にも息絶えてしまいそうで、断続的に呻き声をあげていた。そして、その首には僕のカッターナイフが刺さっていた。その証拠に、柄の部分に「シネ」と乱雑に彫られている。

じゃあ、これは。

「あの子だ」

思わず、そう呟いた。生きていた。こんな姿になろうとも、愛しいあの子は生きていたのだ。ぱつと落ち窪^{くぼ}んだ目をこちらに向け、微かに笑んだ気がした。ああ、そしてあの髪。甘い芳香を放つ髪が、まだ少しだが存在する。成長していない姿形は醜く崩れているものの、あの頃の可愛らしい面影が残っている。今日は、人生最良の日だ。しかし。

しかし何故、こんなに姿になっているのだ。彼女が生きていたことは、それで良い。しかし、どうしてこんな姿になっているのか、予想できない。死体が腐っていく過程を見たことがあるのだが、今の彼女は腐りゆく人間のそれに近い。こんな姿で、体のあらゆる器官が生きているとは考えられない。それ以前に、どうやって今まで生きていたのか解らない。あの出血で何故生きている。見たところでは誰に治療を受けた痕跡も見受けられない。自然にこうなったとは考えにくい。が、現実には常識や科学、論理などで説明しきれものではない。だが、そんな非現実的な体の至る所に現実的な無数の傷がつけられていた。それは明らかに人為的につけられたものであり、その憶測を疑う余地はない。傷は、他の部位よりも人間的な箇所を残している部分にある。誰かが彼女を殺そうと目論^{もくろ}んだのか。誰が。

と、そこで一つの解が浮かんだ。

「待て。もしかして、あいつらはここへ来たんじゃないか？」

尻についた埃を叩きながら、栗鼠女が口角を上げる。

「……かもしれないわね。何でこんな面白いもの、私たちに見せてくれなかったのかしら。それにしても、酷い臭い」

理由は分かっている。僕以外で彼女を笑い者にする為だ。ペアである栗鼠女に見せるということは、僕にも見せる結果になる。あいつらはここへ来て、彼女を痛めつけるだけ痛めつけて帰って行ったのだ。事前に、僕と栗鼠女を除く人間に教えておいたに違いない。鍵のかかっている廃屋に面白いものがある、と。そして事前に南京錠を外す鍵を渡しておいたのだ。いや、そもそもあれは鍵をかけた

ように見せているだけの偽物だったのだ。

「ねえ、さっきあの子だって言ってたけど、これに見覚えがあるの？」

「これ、だつて？」

怒りを込めて、言う。しかし、栗鼠女は無視をした。

「じゃあ、これがあいつの言っていたお化けなのかな？　なんだ、拍子抜けね。想像以上に気持ち悪いけど、襲ってこないんじゃないわね」

気持ち悪いだと？　あの子が、気持ち悪いだつて？

愛しいあの子が、痛い、痛い、と、餌を求める鯉のように口をばくばくさせながら言っている。しっかりとした意識はあるようだ。

「あいつの隠した死体って、これだったのね」

「なんだって。あいつが隠した？」

電流が、頭の天辺から、足の先まで、体中を駆け巡った。何故だ。あいつは、この子の隠し場所を誰かに吹聴して回っていたのか。僕には言わなかったくせに、どうしてだ。言いふらしたところで、何の利益もないはずだ。それなのに。

「そう、これはきつとあいつが隠したんだよ。そう言ってた。あいつ、今日肝試しに来た連中にも言いふらしてたよ。前に、俺は死体を隠したことがあるんだぞ、って言ってたこともあったっけ。その

時はどうせ冗談だろうと思っただけだ。本当にあるなんて、考えてもみなかった。でもその死体の特徴をやたら詳しく語るんで、真に受けている人はいたよ。それであいつを怖がってたわけ。これ、あいつが語ってた特徴とぴったりだよ」

言いふらしていた？ あの状態では僕が殺したのか、あいつが殺したのか判然としないはずだ。自分こそが犯人だと、いや、共犯者だと名乗りをあげることに何の意味があるというのだ。いや、意味ならあるか。自分は犯罪の、しかも殺人の片棒を担いでいたと言え、気の弱い人間程度なら思いのままに動かすことができる。あいつはまた、恐怖による独裁を実行しようとしていたのだ。

ふざけるな。むらむらと、怒りが込み上げてくる。だが、あくまで冷静に、事の真相を問い質さなければならぬ。

「何でそういうことになったのか、詳しく教えてくれ」

「あ、君は知らなかったんだね。良いの？ 中々衝撃的な内容だから、君の純粋な心が傷ついちゃうかもしれないけど」

今さら、僕のどこが傷つくというのか。幼い頃から見知らぬ人まで気持ち悪いと言われ続け、愛しい彼女は生きてこそのものの、変わり果てた姿になってしまっている。それに加えて、僕と同じ気持ち悪いというレッテルまで貼られてしまったのだ。気持ち悪いのは、僕だけで良いのに。どうして、あの子まで。

いよいよ死を望む気持ちは強くなり、どうしようもない無力感が体を蝕んだ。しかし、話を聞かなくては。

「構わない」

「じゃあ、話すよ」

こほん、小さく咳払いをして、口を開く。僕は彼女の方を見ず、溶けているあの子をじいっと見つめる。呻くだけで、一步も動くことができないのか、ただ悲しげな眼差しをこちらに向けている。

「確か、あいつが小学生の時、クラスの女の子が行方不明になったみたいじゃない。結構、騒がれていたわよね。教師の監督不行き届きだとか、色々言われていたよね。でもね、あれ、実は誰かが殺して、それをクラスの連中と共同でこの廃屋に隠したのよ。その時、初めて友情が芽生えたって、あいつは笑ってた」

ああ、どうして廃屋を調べようと思わなかったのだろうか。想像以上に単純な場所ではないか。僕は、己の無力さに歯噛みする。

「何で、隠したんだろう。警察に言えば良かったじゃないか」

「あいつの話では、クラスで一際気持ちの悪い男子と女子がいて、その女の子がそいつを庇^{かば}ってばかりいたらしいの。そんな時に恩を忘れた気持ち悪い男子が、何か発狂して、カッターナイフで女の子を襲ったみたいなのね。そこであいつは英雄のように助けに入ったんだけど気持ち悪い男が想像以上に抵抗するもんだから、上手く助けられなかった。半狂乱になった男はあいつを突き飛ばして、女の子を刺したのね。で、その気持ち悪い男に罪が被らないよう、警察に言わずに死体を隠してあげたってわけね。優しいなあ」

どうやら、その邪魔をした気持ちの悪い男が僕であるということ
は知らないようだ。

栗鼠女の聞いたあいつの話には、所々脚色されている部分があるし、間違っている部分も多くある。真の正義をあいつが持っているとするれば、事件の真相はとっくの昔に明らかとなっているはずだ。きつと僕が同じ話をすれば、受ける印象は大きく変わるだろう。あいつは、僕が暴露することを恐れ、勝手に話を作り変え、己がまるで英雄かのように吹聴して回ったのだ。どちらにせよ死体遺棄となるのに、己の悪行を武勇伝として言いふらすあいつの心理は、到底理解できない。

それにしても、これは僕の所為か。そうか、僕が彼女をこんな醜い姿にしたようなものなのか。ならば、その償いは必ず受けねばならないだろう。しかし、あいつはその何倍もの罪を背負い、償うべきだ。自分の罪から逃げることは、絶対に許さない。

「で、これが、あいつの隠した女ってわけね。気持ち悪い」

気持ち悪い。ただその言葉だけが頭の中で木霊する。こだま

「そう言えば、あいつ、前に研究室から強塩基を持ち出してたわね。もしかして、こいつにぶっつけたのかしら。だから溶けてるのかしら。酷いことするなあ、あいつ。うわ、汚い。べとべとする。こんなに焼けて、溶けているのに、何で死んでないの、こいつ。化け物ね。気持ち悪い」

これは強塩基なんかで溶かされたのではない。仮に強塩基を使用したのだとすれば、小学校や近隣で異臭騒ぎが起こっているはずだ。異臭騒ぎが起こっていれば、間違いなくここは特定される。今も尚彼女がいることから、そんな薬品は使われていないと断言できる。それ以外でも、薬品を使ったとは考えられない。これは、腐食や、その他の要因でこうなっているのだ。それが何なのか。

例えば、これは生への執着と特定の人物への憎悪があつたからこそ可能になった、実に神秘的な現象なのではないか。死を超越した新たな生物が誕生したのではないか。彼女は人間という下等な存在を、そして死を超越し、新たな生物となつたのではないか。そう考えると、全て納得できた。

「ね、何でもこいつは生きてるんだろうね。有り得ないよね」

けたたましく嗤いながら、こちらへ顔を向ける。

黙れ。口を開くな。これ以上、彼女を侮辱するな。

栗鼠女が甲高い声で嗤う。嗤う。嗤い続ける。

「さつさと死ねよ、化け物」

挑発と侮蔑を込めた言葉で、あの子を攻撃する。あの子は、痛い、痛い、やめて、やめて、と、壊れたレコードのように、同じ単語を連呼した。

「さつさと逝け、気持ち悪い」

栗鼠女が、落ちていた角材であの子の頭を殴打した。付着していた粘液が周囲に飛び散り、異様な臭いが、僕にとっては懐かしい香りが、より一層薄暗い部屋に充満した。

栗鼠女は上半身を剥き出しにして、あの子を打っている。まるで原始人が狩りを行っているような姿だ。汚らわしく、下等だ。こんな存在に、あの子が傷つけられて良いはずがない。この世界にたっ

た一つの、愛しい宝玉を破壊されてなるものか。

「やめろ」

聞こえていないのか、栗鼠女は攻撃を止めない。彼女の体が歪こじな形に歪み、ああ、と苦しそうに呻く、呻く、呻く。燃え盛るような怒りが体を蹂躪し、抑えようのない衝動と化していくようだ。

「やめろ」

痛々しいその光景に耐えられず、声を少し大きくする。聞こえていない。栗鼠女は暴力行為に夢中となり、外部の情報を全て遮断しているように、無心である子を硬質な棒で殴り続け、たまに蹴る。汗が噴き出して、シャツと肌を密着させる。気持ち悪い。

「やめろ」

僕も、角材を手取る。真つ赤な憤怒ふんぬだけが僕を突き動かす。あの愚劣な女を滅多打ちにして殺し、その形すら留めてやるなど、悪魔が囁く。殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ、この世から消し去ってしまえ。

とんとんと、栗鼠女の肩を叩く。醜い女がこちらを振り返る。栗鼠女は、サディスティックな行為に魅了された、恍惚しんごうの表情だった。僕は黙って、口づけをした。栗鼠女の手から、角材が落ちた。唇を離すと、生温い吐息が吹きかけられた。臭くて堪らない。

そして体を離し。

僕は、思い切り歯を食いしばって、両手に握り締めた角材を栗鼠

女の憎たらしい顔面目がけて、水平に振り抜いた。鈍い、何かが潰れた音がした。女が粘液の池に倒れ伏した。何が起こったか理解していないようだ。潰れた鼻を必死に直そうとしながらも、命の危険を感じているのか、後ずさを始めた。まだだ。まだ足りない。あの子を侮辱した罪は、こんな軽いものではない。

無言で栗鼠女に近づき、高く角材を振り上げ。

「ヒッ」

栗鼠女が最後に、しゃっくりと聞き違えてしまいそうな、短い悲鳴をあげた。

角材で、女の顔をさらに強く打つ。骨格が大きく歪んだ。必死に手で僕を制止しようとしている。無視だ。もう一度、次は額を押し潰す。粘液が女の口に入りこみ、咽返っている。しかし、高い粘度の為か中々吐き出されない。吐こうとすればするほど咽喉に入り込み、体を蝕んでいるようだった。良い気味だ。これは、あの子の恨みと、僕の怒りが織りなす復讐なのだ。

栗鼠女が苦しそうに喘ぐ。あ、あ、と、血と涙に塗れた丸く、黒い眸で僕を見やる。その姿を見ると、堪らなく興奮する。陰茎が破裂しそうなくらいに膨れあがり、僅かに痛みがある。

まだ女は生きている。生物の持つ、生への執着とは、こんなにも神秘的で、惨く、汚らしいものなのか。目の前で溶けている彼女も生きたいのだろう。それなのに、あいつはその意志を踏み躪った。許されることではない。そしてこの女は、執念を手折る発言をした。殺してやる。こいつは、この世から消えてなくなるべき人間だ。

殺せ、殺せ、殺せ、殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ、消し去
ってしまえ。

どれくらいの時間、栗鼠女を潰し続けただろうか。我に帰った時
には、体はもはや原型を留めていなかった。ふくよかな胸は潰れて
裂け、あらゆる部位から臓器やら骨が飛び出していた。腹からは腸
がだらりと飛び出し、栗鼠女はそれを抱くようにして息絶えていた。
どれだけ凄惨な状態だったか、筆舌に尽くし難い。だが、僕は今ま
で感じたことがないくらいに爽快な気分で、頭は冴えていた。

死骸を蹴り飛ばし、あの子の障害を取り除く。

「ねえ、君は僕を覚えているかい？ 小学生の時の、気持ち悪いっ
て虐められていた子が僕だよ」

この問いは必要不可欠なものだった。もう、あれから数年以上の
時が経過している。僕が彼女を認知できても、彼女が僕を認知でき
るという保証はどこにもないのだ。

あの子は一瞬驚いたような顔になり、そして言葉を紡いだ。

「……嘘でしょ？ 信じられない」

あの頃と寸分違わぬ、懐かしい声だ。

「でも、面影があるね。ほら、その離れた目。本当に君なんだね。
凄いなあ。大人になって」

と、そこであの子の顔が苦痛に歪んだ。僕はすかさず彼女のもと
へ向かい、大丈夫かと尋ねた。

「痛いよね。ごめんね、僕の所為だ。髪の毛を千切ったこと、怒ってない？ 僕の所為でこんなことになっちゃって。僕、君のことが心配で仕方がなかったんだ。今まで見つけてあげられなくて、ごめんね。寂しかったろう、苦しかったろう」

とろとろとした、粘っこい液体を体に絡ませて彼女を起こし、頭を撫でてやる。すると彼女は頭を上下させた。そして小さく「大好き」と言ってくれた。愛おしい。じつと顔を見つめるが、爛れた顔からは以前の面影が感じられない。

「こんな姿でも、会えて良かった」

頬は赤くなっていないが、きつと照れている。

見れば見る程、彼女は変わり果ててしまっている。もっと早く、僕が駆けつけていれば、こんな結果にはならなかったかもしれない。罪悪感に駆られ、死にたくなる。しかしここで死んでしまつては、今まで死ぬことのなかった彼女に対して申し訳が立たない。死ぬならば、あいつを殺してからだ。

その前に。

「ねえ、これを覚えているかい？」

ポケットの中から彼女の白い花飾りを取り出し、目の前に示す。この髪飾りは、彼女がいなくなつてからずっと、いずれ再会を果たす時を信じて肌身離さず持っていた。それを見た彼女は、懐かしそうな顔をして、二度、三度と頷いた。

「ごめんね。これ、ずっと返そうと思ってたんだけど、君が見つからなかったから。これ、大切な物なんだよね」

崩れ落ちている頭に花飾りを着けてやると、にっこり微笑んだ。笑顔は酷く歪んでいたが、可愛らしい。再会を果たし、髪飾りを返せたことは喜ばしいことこの上ないが、やはりこんな姿になってしまっているのには心が痛む。早く見つけてやり、葬儀を行うべきだったのだ。そうすれば、こんなところで寂しく生き続けることなんてなかっただろう。僕は、私欲の為に真相を話さなかった。それがこんな悲惨な結果を招いてしまった。

「何で君はこうなっているんだい？」

暫く彼女は悩み、時折苦しそうに顔を歪ませ、口を開いた。

「きつとだけど、もつと、生きていたいと願ったから。私、やり残したことがいっぱいある。そうやって強く願ったら、死ななかった。でも、体は動いてくれなかったし、痛みも苦しみもあった。それどころか、どんどん体が腐っていくんだもの。困ったものよ。やつぱり、神様なんていないね。中途半端だわ。でも、君があの時喧嘩をしないでいなければ、生きていたんだよね。どうして、あの時素直に喧嘩をやめてくれなかったの？ 何で喧嘩をしていたの？」

鋭利な刃物で心臓を抉^{えぐ}られたかのような鋭い痛みがはしる。

その通りだ。彼女の言う通りにしていれば、死なずに済んだ。それに、僕も罪悪感に駆られることはなかった。一人で抱えるには大きすぎる負を負うことはなかったのだ。

「君を奪われなくなかった」

まさか、このような場で愛の告白をするとは思っていなかった。

「どういうこと？」

白濁した真珠のような目を見開き、問うた。

「僕は、昔から君が大好きなんだ。もちろん、今も。あの時あいつは、君に告白して恋人にするって言ってた。僕には、君があいつの恋人になるなんて、そんなの耐えられなかったんだ。それに、仮に君があいつの告白を断れば、今度は君が虐めの対象になる可能性があった。君が僕と同じような目に遭うなんて、我慢ならない。だからその根源を取り除いてやろうと思ったんだ。だけど、こんな結果になったのなら無意味だよな」

「私の為だったんだ」

「うん。でも、僕は君を殺すつもりなんてなかったし、死を忘れたこともない。これだけは信じてほしいんだ」

「信じるよ。私も君が大好きだから。でもあいつは、私を忘れようとしていたみたいね。真実を忘れたかったんだと思う。あいつ、さつきここに来て女の子と性行為をして、私を殴ってから帰っていったわ。それから来た奴らも、同じことをして帰った。あいつ、私をここに置いてからも何度か様子を見に来ていたわ。だけど、一度たりとも治療しようとはしなかった。それどころか、殺そうとしたわ。私が怖かったんだろうね。でも、私は死ななかったけどね」

そこで言葉を切り、悲しげな眼をして続ける。

「君は怖くない？」

愚問だ。

「怖くない」

即答した。あいつとは、想いの質が違う。

「嬉しいなあ。君を好きで本当に良かった」

苦しいはずなのに、そんなことはおくびにも出さずに笑む。彼女はあれだけ苦しそう呻いていたのに、話しかけてからというもの一度も呻き声をあげない。僕に心配をかけまいとする配慮だろう。こんなに気遣いのある女性を、好きになつて本当に良かった。その女性のために、僕は地獄の業火に焼かれることに匹敵するような、凄惨で、激しく、焼け爛れていくような苦痛の伴う復讐を果たさなければならぬ。

「ねえ、君は誰が憎い？」

「あいつしかいない。君には必死に私を探してくれたのに、あまり動けないことを良いことにあいつは殺そうとしたわ。今私がしたいことは二つ。あいつに復讐することと、君と一緒に過ごすこと。でも、前者はこんな体じゃ不可能ね。人に見られたら終わりだわ」

「僕も、あいつが憎いよ。だから、君の願いを叶えてあげる」

指の隙間から、粘液が零れ落ちる。

と、突然、彼女を支えていた右腕が痛み始めた。初めはどこ

かを捻^{ひね}ったのだらうと考えたが、どうもおかしい。腕が直接鉄板で焼かれているかのように、熱いのだ。彼女を支えたまま腕の状態を確認すると、皮膚が、少し溶けていた。少しずつ、少しずつ、表面から焼けて、溶けているではないか。

「君は、ずっとこんな痛みに耐えてきたんだね。可哀そうに」

この痛みは、彼女の痛みだ。僕は今、彼女と痛みを共有している。そしてこれは、僕自身への戒めだ。この痛みを彼女と同じ年数だけ味わい続けて初めて、彼女を殺した罪と、事件の真相を黙っていた罪が償われ、あいつへ復讐する資格を得るというものだろう。きつと、それ以外の方法で罪業を消すことなんてできない。

「絶対に、あいつへ復讐してやる。君と同じ苦しみを、必ず与えてあげる。だけど、今はその資格を有していない。暫くの間、僕は君と同じ苦しみを味わう。それから、きつと復讐を遂げてみせる。それまで、死んでは駄目だ。分かったね」

そう言つと、彼女は小さく笑った。可愛らしかった。

こんな誰も来ず、日の光さえも当たらないような場所に閉じ込め、その姿を晒しものにして、彼女の存在を忘れていないのに悼^{いた}みもせず、話の種として弄んだあいつに、必ず同じ苦しみを味わわせた上で殺してやる。もはや、誰が彼女を殺したかなどということは瑣末な問題でしかない。僕とあいつが殺した。これで良い。

この世にあらん限りの苦しみをあいつに。

そう誓い、あの子をずっと抱きしめ続けた。

僕はそれ以来、大学へは行かなくなった。正確に言うならば、行けなかったのだ。継続的に鋭い痛みが走り、とてもではないが通常の生活が送れるとは思えない。痛みこそあるものの、進学か就職かという選択を迫られることもなくなり、あらゆる柵から解放されて清々しい気持ちだったし、何より自分の成すべきことが明確となったことが嬉しかった。あいつへの復讐は、僕にしかできないことだ。

これから苦痛が数年も続くのかと思うと、清々しい気持ちとは対極的に陰鬱で厭な気持ちにもなったが、ひたすらに焼けつくような激しい痛みに耐え、彼女と共に、廃屋で償いの時を待った。あまりの痛みに外出することすらままならず、食糧の調達もできなかった。しかし、それで困ることはなかった。腹が減らないのだ。何も食さなくとも、死ぬことはなかった。これも、全ては強い願望の為せる技なのだろうか。人体とは、本当に不思議だ。

それより不思議なことは、あいつがあれから廃屋を訪れなかったことだ。栗鼠女と僕の二人ともが消えているのだ。様子を見に来てもおかしくない。しかし、何の気まぐれか、あいつは現れなかった。全く理解できない。だが、来客はあった。

無限に感じる時を、彼女と過ごした。幸せだった。彼女が傍にいてだけで、他に何もいらなかった。幸福に満たされていたが、復讐を忘れることは片時もなかった。いつか来るその時を、僕はただ、黙って待ち続けた。

そして、待ち焦がれ続けた時が来たのだ。

話を終えるとあいつは憤ったようで、目を充血させ、顔を蛸のよ
うに真っ赤にしていた。この目に見える反応は、この話が単なる昔
話ではないと考えた結果だ。

7

「それで？ その話をして、俺にどうしろと言った。今の話を聞
く限り、自分に何か関係のあるものとは思えないな。体が溶けるだ
って？ 馬鹿らしい、全て御伽噺だ。しかも、何の面白味もない、
悪趣味で、低俗な作り話だ。俺は、帰るぞ。約束は今度だ」

あいつは語気を荒げて言い、相変わらずいやらしい嗤い声をあげ、
鞆を取り、煙草を咥えながら席を立った。

「待ちなさい。惚けるのは止してください。今の話は全て真実だ。
僕は、罪を再認識してもらう為に話をしたのです。あなたには、罪
を償ってもらいますよ」

「はっ。何が罪を償ってもらった。人間は、皆罪人だ。罪に塗れて^{まみ}
人生を過ごすものさ。それに、俺はキリスト教で言う原罪以外なら
潔白の身だ。何もしちゃあいない。人違いだ。俺はその『あいつ』
とやらじゃあ、断じてない」

「見苦しいですよ。人違いならば、何故そんなに慌てて帰る必要が

「ありますか」

「見苦しいのはお前だ。この暑い時に黒い布を被りやがって。それに、その顔は何だ。品はないし、目が離れ過ぎている。唇も分厚い。俺はな、お前みたいな暇人と違って、忙しいんだ。くだらない話にいつまでも付き合っていられるか」

あいつは片方の眉を吊り上げながら、煙草の煙を僕に向かって吐き出した。臭い。息をするな。いや、もう直にできなくなるのだ。今の内に新鮮な空気を吸って、吐いていると良い。

「それにお前は何だ？ その女を弄んだのが俺だと言いたいわけか？ 言いがかりも良いところだな。仮にそうだとしても、お前が俺に敵う道理はないだろう？ 復讐だなんて、笑わせてくれる」

空を切り、あいつはごつごつとした拳を僕の目の前に突きだした。

「それに、お前は何故その話を知っている？ 誰に聞いた？ 誰からも聞いていないはずだ。そうか、あの気持ちの悪い男の友人といったところか。あいつは死んだか？ いや、生きているはずが」

「僕は、あの気持ち悪い男ですよ」

一瞬、呆気にとられたような表情になり、その後、怪訝そうな顔になった。信じられないようだった。

「嘘をつくな」

「おや、どうしてそんなに慌てているのですか？ その気持ち悪い男は、死んだと思っていましたか。嫌だなあ。行方を晦くらましたから

とって、そいつが死んだとは限らないでしょう。ほら、あの子だってそうだったじゃないですか。あんな醜い体になりながらも、ずっと生き続けていた。もつとも、どんどん液状化していて、生きているかどうか、定かではないですけどね。いや、彼女は死にながら生きているんだ」

「あの子」

あいつは明らかに、何かを知っている風な顔をした。

隣の椅子に置いてある匣を撫でる。

「生きているはずない。あいつは親にも何も言わずに行方を晦ませたんだ。行方不明として処理されたんだ。そんな奴が、こんな長い期間、どこでどう過ごしていれば生きていられると言った。それに、ちゃんと確認を」

言葉を遮る。

「廃屋、ですよ。あなたがあの子を運んだ、あそこです」

あの子を刺したあの時と同じような、狼狽えた顔になった。冷房がきいているはずなのに額からは汗が滲み出し、息遣いが荒くなっている。

「嘘だ。あんな食糧も何もないところで、生きていられるはずがない。常識的に考えてみる。何も飲まず食わずで、生物が生きられるわけがない。あそこには誰も立ち入れないし、あんな奴に食糧を持つて行く奴もいない。そんな奴、異常だ」

忙しなく、煙草を吹かし始めた。灰が長くなってきたというのに、一向にそれを灰皿へ落とそうとしない。これこそ、狼狽している証拠だ。

「世の中、常識では説明のつかないことだらけですよ。あなたの行動も、あの時あなたの取り巻きがとった行動も、何もかも常識なんかでは説明できない。異常だ。ならば、僕が異常な存在であってもおかしくないでしょう。ああ、そうだ。生物で納得がいかないのであれば、それが、生物でなかったとすれば、どうですか？」

「生物じゃない？」

眉間に皺を寄せ、怪訝そうな顔をする。

「冗談ですよ。それより」

匣の紐を解く。かたかたと、音がする。

「何故、廃屋に誰も立ち入れないと分かっているのですか？ あそこはH小学校の子供くらいしか一つの抜け道を除いて侵入口がないことを知らない。あなたは、僕の探しているあいつではないのでしょうか？ なら、何故知っているのですか。それに、何故、僕を知っているのですか。それに、あの話を知っているとはどういうことです？ まるで、あなたが全てを知っているようだ」

「ア……」

本当に、馬鹿だ。普通の人間であれば、こんな誘導に引っかかるようなことはない。

「いつまで白を切り続けるつもりですか？」

あいつは額一杯に玉のような汗をかき、拳が砕けんばかりの力で手を握っている。顔は見る見るうちに紅潮し、怒りと真実を突きつけられた恐怖が滲み出している。

「こ、こいつ。殺してやる！」

あいつは何を思ったのか、椅子を蹴り飛ばし、唐突に飛びかかってきた。酒瓶とグラスが落ち、砕けた。攻撃は無意味だ。あいつの拳が僕を打つが、痛みは全くない。腕に巻きつけていた暗幕にも似た布を取り払い、右腕で、あいつの顔を鷲掴みにした。あいつが、聞いたことがない程の痛烈な叫びをあげ、僕の触れた箇所が溶け始めた。鼻や頬がどす黒く変色し、赤身が露あらわになっている。

「ア、ア、ア……」

相当効いたのだろう。これが、僕と彼女の憎悪だ。あいつは倒れ、その場で暴れまわった。そして、カウンターの裏へ逃げるように回り込むと、再び叫んだ。今度は、戸惑いの中に悲しみが含まれているようだった。堪らなく愉快だ。

「おい、どうかしたか？ 友達でも死んでいたか？」

今までの紳士的な話し方をやめ、問うた。

事実、カウンターの裏では、彼女を廃屋へ運んだ二人の男のうち一人が 店主だ 半分骨になって死んでいる。店主は長髪を乱し、苦悶に満ちた表情だ。こいつは僕が思い切り抱くと、粘液によって、殺虫剤をかけられたゴキブリのようになたうちまわった後に

呆気なく命の灯を消した。この店を貸し切ったなんて、真っ赤な嘘だ。正しくは、奪い取ったのだ。

「お、お前が殺したのか？」

あいつは恐れと驚愕を込めた口調で言った。僕は黙って頷いた。

「後で騒がれちゃ困るからな。さっさと殺しておいた」

「じゃ、じゃあ、角張男も、まさか　連絡が取れないのは」

なかなか賢^{さか}しいではないか。

「僕が殺したからだ。最近、お前が角張男を廃屋へ送り込んだんだろ？　急に訪ねてくるものだから、驚いたよ。お前がまさかまだ僕のことを覚えていて、尚且つ恐ろしく思っているなんて考えてもみなかったよ。用心深いもんだ。やっぱり、そこに何者がいるという、あの時発覚した現実が怖かったか？　それにしても、角張男を廃屋へ送り込んでくれたのは、僕にとって都合が良かった。お前ら三人の居場所が全く分からないんだからな。角張男のおかげで、残る二人の住所や勤め先を知ることができた。それと、お前と店主、角張男とのメール履歴も見せてもらった。頻^{しき}りに僕が生きていないかどうかを確認していたな。もつとも、本人は死んでいるから返信なんてできなかったんだけどな。ということは、だ。お前をここに呼び出し、嘘の報告をしたのは僕というわけだ。『あいつとあの子は骨になっていた』。たったそれだけの返信でお前は安堵したことだろうな。だからお前はさっきから、僕が死んだものだと思っていたんだ。今日は、確か祝杯をあげることにしていたかな？」

「う、嘘だ。そんなこと」

「嘘だと思っならあの子を捨てた、思い出深い廃屋へ行ってみれば良い。今頃、完全に白骨化したお友達が数人待っていてくれているだろうよ」

「この、悪魔め！」

あいつは蔑んだような顔になり、その身に似つかわしくない台詞を吐いた。

「黙れ」

僕は右手であいつの両頬を鷲掴みにし、どろどろとした粘液を肌に伝わせた。すると、さつきと同じように黒煙と悲鳴があがった。

「なあ。体が溶けるなんて、御伽噺なんだろう？ この目の前の現実をどう受け止めるんだ？ え？ お前の大好きな論理や常識で説明できるのか？」

もうあいつに、情状酌量の余地はない。僕は黒い布を破り捨て、その体を露わにした。右腕は完全に爛れ、ぼたぼたと粘性のある液体が滴っている。そして、右手で触れてしまった顔の一部や体は、赤い肉を外気に晒している。そこからも、徐々に溶けていく感触がある。今では、首から胸のあたりそして足の先まで、とても人目には晒せないほどに醜く変化している。しかし、何故彼女と同じ年数の苦痛を味わいながらも人としての形を維持しているのか、考えてしまう。だが、すぐに結論を出した。僕がまだ人でいられるのは、あの子の為に復讐を果たすという責務があるからだ。その責務を果たした後に液化化するか、それとも死んでしまうかもしれない。死は怖くなかった。むしろ喜びであるようにすら感じる。

あいつは僕の体を見るやいなや、今まで信じ切れなかった現実を受け入れたのか、掌を返したように態度を変えた。

「た、頼む。許してくれ。全部認める、認めるから。お願いだ。あの時のあれは、全部きまぐれだったんだ。本当だ。ちゃんと罪も償う！ 警察に言ってくれても良い！」

目を赤く充血させ、左手で顔を押さえながら、右手で僕を制止している。もつとだ。もつと怯えると良い。その恐怖に歪んだ顔こそ、今まで僕が望んできたものだ。

「ふうん、警察ね。そこに通報すれば、お前を拷問にでも処してくれるのかい？ 僕はね、警察で真つ当に罪を償うことなんて、そんなことは望んじやいない。僕はお前に苦しんで欲しいんだ。ほら、彼女も許してくれないって。ほら、匣の中で、怒っている。そんな生温い罰で、償えるわけがない」

「エ
」

無慈悲に、手に持っていた匣を床に落とした。からん、という乾いた音と共に、どろりとした中身が溢れ出した。匣から零れた赤黒い色をした液体は、僕の愛しい彼女だ。少し前に、完全に液化してしまった。あの時は、慌てたものだ。どの部位を拾わなければ死ぬのか、そんなことを考えながら手近にあるもので必死に体をかき集め匣に詰め込んだ。少し取りこぼしてしまったが、死ななくて良かった。それに、美しさも損なわれていない。

「久しぶりに会えたね。君、私のこと、好きだったんだってね」

彼女は、じりじりと、ゲル状の体をくねらせ、嗤いながらあいつに迫っていく。一体どこから動く力が湧いてくるのか、どの器官を通じて話しているのか解らない。目も、鼻も、口も、耳も、頭も、四肢も、何もないのだ。彼女は人間を超越した存在なのだから、どうやって生きているのか、話しているのか、聞いているかなどという問題は瑣末なことだ。彼女のことは、誰も理解できない。いや、僕だけが理解できる。そう、僕だけが。

彼女が通った箇所から、うつすらと黒煙が立ち昇る。憎しみで焼けているのだ。

「く、来るな！」

あいつは見苦しく、手当たり次第に瓶を彼女に投げつけた。だが、いくら破片が刺さるうとも、瓶が顔を殴打しようとも、意味はない。もはや痛覚なんてないのだ。けれども、愛しい人が傷つけられるのは、見るに忍びない。

さつと手を振り、粘液をあいつの顔目がけて飛び散らせる。目に直撃した。もう、目は見えまい。鋭い叫びと、狼狽える姿は、見ていてとても愉快だ。今まで、こんなに愉快な気分になったことはない。彼女と再会できた時こそ最良の日だと思ったが、今日、復讐を遂げるこの日こそが、最良の一日だ！

「彼女に手を出すなよ。気持ち悪い。お前は何様のつもりだ」

あいつに唾を吐きかける。

「ねエ。こいつ、殺しても良いんでしょう？　ずっと待ってたんだもん。良いよね？」

可愛い仕草で、残酷なことを言うものだ。このギャップも堪らない。

「良いとも。でも、もう少し待っておくれ」

あいつの前に屈む。硫黄にも似た異臭がする。

「聞いておきたいことがいくつかあるんだ。違うな、確認しておきたいことだ。言い訳はするな。全て、分かっているんだ」

あいつは諤々（がくがく）と震え、壁に向かって後退りしている。

「お前が廃屋に来なかつた理由は、気まぐれじゃないだろう？　僕は知っているんだ。あれから、お前は確かに来なかつたが、彼女と再会してから暫くして、女三人が来た。赤毛の女、金髪の女、そしてお前の女。あの時、お前は本当に変わってないなって思ったよ」

「うん、うん、うん、うん。」

「黙れ。今は僕が話しているんだ」

首を掴み、表面を溶かすと、黒煙と悲鳴が上がった。

「お前は、あの女連中を口車に乗せ、廃屋の様子を見に行かせたんだ。では、何故女連中だけで、男たちは行かせなかったのか。何故、お前は直接行かなかったのか」

荒い息遣いだけが聞こえる。店内に流れていたはずのクラシック音楽はいつの間にか終わりを迎え、静寂が支配していた。恐ろしい

ほどの静寂だ。

「お前は、栗鼠女の行方が分からなくなったことだけが気がかりだったんだろう。あの女連中は、栗鼠女と仲良くやっていたからね。あのまま放っておけば、そのうち騒ぎ出す。恐らく、廃屋にまだいるかもしれないと言って、彼女らを言い包めたんだろう。そして、女たちは集団で廃屋を訪れた。栗鼠女が見つければそれで良し。見づからなければ、女たちが騒ぎ立てないよう、自分の手か、誰かを使つて殺せば良い。だが、男たちにはそんなこと関係なかった。お前が口止めするだけで十分だったんだ。殺す必要もない。小学生の頃から変わらない性質だな。だが、あの女たちはそう上手くいかない。あいつらは、大学生の時に知り合つた奴らだ。お前の見せかけだけの怖さなんて、微塵も知らないんだ。例え、お前が死体を隠すような悪人であると知つてもね」

こいつは、ずっと変わらない。人を使うことだけに長けており、何よりも自分を優先させる。僕なんかより、ずっと気持ちの悪い生物だ。人間ではない。人の形をした別の生き物だ。

「あの女たちも　お前が殺したのか」

掠^{かす}れるような声で、あいつが言う。

「そうだよ。僕らの幸せな時間と、僕の償い、生への執着を踏み躪^{にじ}ろうとしたからな。あいつらは僕らを見るなり、あの廃屋に火を放とうとしたんだ。折角生かして帰してやろうと思つたのに、そんな思いはさつと消えたね。邪魔をしなければ、今でも生きていただろうに。もっとも、今頃は死んでいるだろうけどね」

嗤い、さらに続ける。

「僕が大学からいなくなった時点で、お前は計画が上手くいったと思っただろう。ということは、同時にあの子を発見したということだ。まさか、僕がずっとあそこにいたことまでは予想していなかったみたいだけどね。だから、安心して女たちを偵察に向かわせた。だけど」

酒瓶の中から適当な瓶を一つ取りだし、中身を飲み、喉を潤す。

「死んでしまった。女たちに見に行かせたものの、帰ってこないから段々と不安になってくる。そこに何かがいることが分かったんだ。彼女は人を襲えない。襲ってきたとしても、その気になれば簡単に逃げ切れる。しかし帰ってこないならば、それ以外の誰かに襲われた可能性が高い。不安で仕方がないが、自分で見に行くわけにはいかない。仮にその誰かが僕であるならば、お前は女同様に襲われることになる。ならば、そのまま放っておけば良い。誰かはいずれ餓死する。事件は風化する。そしてお前は、あの時、あの子にしたように、全てを見なかったことにしたんだ。しかし最近になって、どうしたことが廃屋にいる何者かが気になった。今度こそ誰もいないと確信し角張男を向かわせたが、またもお前の予想は外れ、角張男は死んだわけだ。いやあ、お前が見に来なくて良かったじゃないか。そのおかげで、今まで生きることができたんだから。有意義な人生だったかい？」

喘鳴^{ぜいめい}がする。今にもあいつの心臓の音が聞こえてきそうだ。僕は煙草に火をつけ、吹かした。まるで名探偵になった気分だった。煙をあいつに吹きかけて、続ける。

「さて、最後の疑問だ。何故、お前は僕を肝試しと銘打った、淫行企画に僕を誘ったのか。しかし、僕らだけにあの廃屋への侵入を禁

じた。これは、明らかに矛盾する。入って欲しくないのなら、最初から誘わなければ良いんだからね。お前は、侵入を禁じていても僕がそこへ入って行く自信があったんだ。何故なら、全ての廃屋にはカメラが仕掛けられていたんだからね。そんなところで行為に及ぶ馬鹿はいない。お前は僕が性欲に屈すると確信していたんだろう。

実際そうなってしまうたわけだから、僕としては悔しい限りだ。さて、許可されている場所全てにカメラが仕掛けられているとなれば、後は禁じられた廃屋しかない。そこにカメラはなく、行為に及ぶ可能性は一気に上がり、留まる可能性も上がる。そして、いずれはあの呻き声に気づく。声に気づかなくとも、臭いで何かおかしいと考える。それを気にかければ、あの子を必ず発見する。あの子こそが、あの時お前の言った良いものだったんだ。あの子の変わり果てた姿を見て衝撃を受け、僕は自殺する。栗鼠女はそれを見て見ぬふりをして立ち去り、お前にとつての最良の一日となる。そこまでがお前の計画だったんだ。お前は、僕があの子だけを生き甲斐としていたことを知っていたはずだからね。自分の生きる意味である女の子が変わり果てた姿になっていれば、きっと死にたくなる。事実として死にたい衝動に駆られたが、残念。僕の彼女への愛情は、そんなものじゃない。お前とは違って、生きてさえいればそれで良かったんだ。お前は、僕を甘く見過ぎたね。いや、ただ短絡的なだけか」

うふふ、と彼女が笑う。僕も嗤う。

あいつは顔から血の気を引かせ、真っ青だった。喉が焼けてしまったのか、何も言葉を発さず、ひゅうひゅうと息をするだけだった。今、あいつは絶望の淵にいるだろう。ずっと監視して事件の話をさせないようにして、それに嫌気がさしたのか、他人の手を使ってでも殺そうとしたのに、結果として僕は死なず、逆に今、自分を殺そうとしている。

あいつが今まで積み上げてきたものを全て崩す。これこそが、僕の考えた復讐だった。後は、あの子に任せておけば良い。これから、あの子が恨みを晴らす番だ。

「ねエ、そろそろ良いでしょ？」

手はないが、もしもしているように思える。

「あいつにはあらゆる罪業の再確認をしたから　うん、良いよ。もうお話　いや、僕の復讐は終わったから。後はお好きにどうぞ。いやア……お前に、僕らの幸せな人生を見てもらえないのが残念で仕方がないよ」

あいつはかたかたと手を震わせながら、僕の足元に垂れる布を掴み、命乞いを始めた。この期に及んで見苦しい。

「や、めろ。やめ、てくれ。お願い……だ……カ。何でもする、だから」

必死に声を絞り出している。そんな命乞いに、今さら意味はない。

興奮で口内が渇く。待ちに待った、この時が、とうとう来た。

「　ああ、気持ち悪い」

僕がそう言ったのを皮切りに、彼女はあいつに飛びかかり、その体ですっぽりと覆い尽くしてしまった。憎むべき奴を目の前にして、我慢できなかったみたいだ。初めは元気良く悲鳴をあげ、ゲル状の彼女を引き剥がそうと必死に抵抗していたのに、すぐそれは止んでしまった。あいつは異臭と黒煙を放ちながら、跡形もなく消え去っ

た。しんとした店内に、人間はいなくなつた。

復讐を果たして清々しい気持ちだったが、正直な話もっと、あいつの藻掻く姿を見たかつた。彼女の喜ぶ姿を見たかつたのに。あいつはあつという間に溶けて消えてしまった。それだけ、彼女の憎しみが強かつたのだらう。まあ、これで全ては終わったのだ。それ以上望むことはできない。本当に、命とは呆氣ない。

「こつちへおいでよ」

ずるずると、赤黒い体を引きずりながら彼女が寄ってくる。僕はそれを匣の中に仕舞い込んでから、頬ずりをした。頬にざらざらとした感触がある。この匣も相当古くなっているし、もう暫くしたら変えてやらねばならないと思つた。新しい人生がこれから始まるのだから、新居を構えてやるのも悪くない。もう、復讐を考えて生きることではなく、ただ盲目に幸せを追求できるのだと考えると、胸が躍り、魂が狂喜の叫びをあげるようだった。

「今日是最良の一日だ」

「うん、そうだね。 ふふ、あはは」

彼女の可愛らしい嗤い声が、最良の一日の幕を下ろした。

明日からは彼女と共に過ごす、もっと幸福な日々が待っているそう
だ。

(了)

7（後書き）

どうも、要徹です。この度は拙作「最良の一日」をお読みいただき、誠にありがとうございました。

本作品はジャンルをホラーとしていますが、どうもホラーらしくないと言われがちです。とある友人は「サスペンスに分類されるのではないか」と言っていますが、どうなのでしょう。

ホラーらしくないと言われる理由には心当たりがありまして、そのひとつが私自身の意識が現れているからだと思います。

私がこの作品を書くにあたって重点を置いた箇所は「不快感を与えること」「胸糞悪くなってもらうこと」「純粋な恋情を描くこと」の三つでした。それをすべて達成する為に最も適したジャンルがホラーだったのであって、言ってしまうえばホラー的な要素を組み込む意識はあまりありませんでした。その意識の所為でホラーにとって重要な要素が欠けてしまったから、ホラーらしくないと言われるのでしょうか。

さて、皆さんはこの作品を読んで、いかがでしたか？ 胸糞悪くなりましたか？ 不快な気持ちになりましたか？ 主人公の恋情をどう思いましたか？ 一体、あなたは何を思いましたか？ 是非、感想や意見をお聞きしたく思います。

それでは、ここまでお付き合いいただきありがとうございました。読者の方と、創作活動を愛するすべての人に感謝と敬意をこめて、また、次回作でお会いしましょう。

お疲れさまでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9235q/>

最良の一日

2011年3月1日20時30分発行